

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書31

－ 市原市大和田遺跡群(3)・(7)・高滝陣屋跡 －

平成 28 年 3 月

国土交通省 関東地方整備局

公益財団法人 千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書31

いち ほら おお わ だ い せき ぐん たか たき じん や あと
－ 市原市大和田遺跡群(3)・(7)・高滝陣屋跡 －



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第757集として，国土交通省による首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した市原市大和田遺跡群(3)・(7)及び高滝陣屋跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，古墳時代古墳，古墳時代～奈良・平安時代横穴，近世塚などが検出され，この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成28年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 堀田弘文

凡 例

- 1 本書は、国土交通省による首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡の所在地・遺跡コードは、以下のとおりである。

大和田遺跡群(3)	市原市大和田字緑岡378-19ほか	(遺跡コード 219-089-3)
大和田遺跡群(7)	市原市大和田字三島198-2ほか	(遺跡コード 219-089-7)
高滝陣屋跡	市原市大和田字三島185-2ほか	(遺跡コード 219-095)
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、国土交通省の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、主任上席文化財主事 井上哲朗が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所、市原市教育委員会生涯学習部ふるさと文化課の御指導・御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は以下のとおりである。

第1図	国土地理院発行 1/25,000地形図「鶴舞」(NI-54-19-16-2) (平成17年発行)
第2・11図	市原市 1/2,500 市原市基本図(昭和55年製図)に加筆。
第3図	参謀本部陸軍部測量局 1/20,000迅速側図「鶴舞村」・「田淵村」(明治19年版)
第4・23図	国土交通省千葉国道事務所作成 圏央道計画図(平成17年)を加工して使用
- 8 大和田遺跡群(3)の地形測量、大和田遺跡群(7)の横穴の実測は、業者に委託して実施した。
- 9 図版1の遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和53年撮影のものを使用した。
- 10 図版22の金属製品X線写真は、千葉県産業支援技術研究所の協力を得て撮影したものである。
- 11 本書で使用した座標はすべて世界測地系で、図面の方位はすべてその座標北を示す。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査概要	4
第2節 遺跡の位置と環境	4
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	6
第2章 大和田遺跡群(3)	10
第1節 調査概要	10
第2節 遺構と遺物	10
1 古墳	10
2 塚	16
第3章 大和田遺跡群(7)	17
第1節 調査概要	17
第2節 遺構と遺物	17
1 横穴	17
2 やぐら状遺構	29
3 炭窯	33
第4章 高滝陣屋跡	38
第1節 調査概要	38
第2節 トレンチの状況	38
第3節 遺物	41
第5章 まとめ	42
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	大和田遺跡群・高滝陣屋跡の位置と 周辺遺跡……………	2	第13図	横穴1……………	21
第2図	大和田遺跡群周辺地形図(1)……………	5	第14図	横穴1出土遺物……………	22
第3図	大和田遺跡群周辺地形図(2)……………	8	第15図	横穴3……………	26
第4図	大和田遺跡群(3)周辺地形図……………	11	第16図	横穴4……………	27
第5図	確認調査トレンチ配置・土層断面図……………	12	第17図	横穴5・6……………	30
第6図	SM-1・2調査前地形測量図……………	13	第18図	やぐら状遺構……………	31
第7図	SM-1表土除去後地形測量図……………	14	第19図	やぐら状遺構出土遺物分布図……………	32
第8図	SM-1・2土層断面図……………	15	第20図	やぐら状遺構出土遺物……………	34
第9図	SX-1……………	16	第21図	炭窯1・2・3……………	35
第10図	大和田遺跡群(3)出土遺物……………	16	第22図	横穴1・3～6形状……………	37
第11図	大和田遺跡群の横穴関連遺構と 7次調査のトレンチ配置……………	19	第23図	高滝陣屋跡調査区全体図……………	39
第12図	横穴分布状況……………	20	第24図	トレンチ内土層断面図……………	40
			第25図	高滝陣屋跡出土遺物……………	41

表目次

第1表	大和田遺跡群(7)遺構一覧……………	18	第4表	金属製品計測表2(鉄鏃)……………	24
第2表	横穴計測表……………	20	第5表	金属製品計測表3(銭貨)……………	32
第3表	金属製品計測表1(鉄製直刀・刀子)……………	23	第6表	金属製品計測表4(鉄釘)……………	32

図版目次

図版1 周辺航空写真(1978年)	図版4 大和田遺跡群(3) 調査前 (1)東部緩斜面部調査前 (2)東部緩斜面部調査前 (3)東部台地上調査前 (4)SM-1伐採前 (5)SM-1伐採前 (6)SM-1・2伐採後 (7)SM-1伐採後 (8)SM-1清掃後
図版2 大和田遺跡群(3) (1)調査区台地近景 (2)調査区西部SM-1・2	
図版3 大和田遺跡群(3) (1)SM-1及び西部 (2)SM-1全景	

図版5 大和田遺跡群(3)

- (1) SM-2 伐採前
- (2) SM-1・2 伐採後
- (3) SM-2 伐採後
- (4) SM-2 清掃後
- (5) トレンチ1・2
- (6) トレンチ1・2
- (7) トレンチ2 西端部土層
- (8) トレンチ2 西端部土層

図版6 大和田遺跡群(3)

- (1) トレンチ3・4
- (2) トレンチ3・4
- (3) トレンチ3 土層
- (4) トレンチ3 西端部土層
- (5) トレンチ4 西端部土層
- (6) トレンチ5
- (7) トレンチ6
- (8) トレンチ7

図版7 大和田遺跡群(3)

- (1) SM-1 表土除去
- (2) SM-1 表土除去

図版8 大和田遺跡群(3)

- (1) SM-1 表土除去 南西部(2区)
- (2) SM-1 地山面及び周溝 東部(1区)
- (3) SM-1 地山面及び周溝 全景

図版9 大和田遺跡群(3)

- (1) SM-1 南西部(2区)
- (2) SM-1 北東部(1区)
- (3) 2区 SX-1 プラン検出状況
- (4) 2区 SX-1 プラン検出状況
- (5) SX-1 土層
- (6) SX-1 完掘
- (7) SM-1 2区掘り下げ土層

(8) SM-1 2区掘り下げ土層

図版10 大和田遺跡群(3)

- (1) SM-1 1区土層
- (2) SM-1 1区
- (3) SM-1 西部(3区)土層
- (4) SM-1 2区中腹
- (5) SM-1 2区西側周溝
- (6) SM-1 2区南側周溝
- (7) SM-1 2区中腹
- (8) SM-1 1区北西部周溝

図版11 大和田遺跡群(3)

- (1) SM-2
- (2) SM-2
- (3) SM-2 マウンド除去後

図版12 大和田遺跡群(3)

- (1) SM-2 北東部(1区)
- (2) SM-2 南東部(2区)
- (3) SM-2 南部

図版13 大和田遺跡群(3)

- (1) SM-2 北西部(4区)
- (2) SM-2 北東部(1区)
- (3) SM-2 南東部(3区)
- (4) SM-2 北東部(1区)
- (5) SM-2 南東部(2区)
- (6) SM-2 南東部(2区)
- (7) SM-2 北東部(1区)
- (8) SM-2 東部

図版14 大和田遺跡群(7)

- (1) 遺跡遠景
- (2) 遺跡近景
- (3) 東部遺構群
- (4) 西部遺構群

図版15 大和田遺跡群(7)

- (1)横穴5・6
- (2)横穴5奥壁・棺座
- (3)横穴3～6 レーザー計測点群画像

図版16 大和田遺跡群(7)

- (1)横穴1
- (2)横穴1調査前
- (3)横穴1正面
- (4)横穴1奥壁
- (5)横穴3調査前
- (6)横穴3正面
- (7)横穴3正面
- (8)横穴3奥壁

図版17 大和田遺跡群(7)

- (1)横穴4調査前
- (2)横穴4正面
- (3)横穴4玄室内
- (4)横穴4棺座
- (5)横穴5・6全景
- (6)横穴5棺座
- (7)横穴6全景
- (8)横穴6奥壁

図版18 大和田遺跡群(7)

- (1)横穴6床～壁面
- (2)やぐら状遺構全景
- (3)やぐら状遺構遺物出土状況
- (4)やぐら状遺構中央部遺物出土状況
- (5)炭窯1全景
- (6)炭窯2全景
- (7)炭窯3正面
- (8)炭窯3全景

図版19 大和田遺跡群(3)・(7)

- (1)大和田遺跡群(3)出土遺物

- (2)大和田遺跡群(7)出土遺物

図版20 大和田遺跡群(7)

- (1)土師器壺
- (2)磁器碗
- (3)礎石
- (4)礎石
- (5)礎石

図版21 大和田遺跡群(7)

横穴1・やぐら状遺構出土金属製品

図版22 大和田遺跡群(7)

横穴1出土金属製品X線写真

図版23 大和田遺跡群(7)

- (1)やぐら状遺構出土礫
- (2)炭窯1出土金属製品

図版24 高滝陣屋跡

- (1)調査終了後全景
- (2)1トレンチ
- (3)2トレンチ
- (4)3トレンチ
- (5)5トレンチ
- (6)7トレンチ
- (7)光厳寺(平成26年撮影)
- (8)高滝陣屋跡出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過(第1・2図)

首都圏中央連絡自動車道(圏央道)は、都心から半径約40km～60kmの位置に計画された延長約300kmに及ぶ環状の自動車専用道路である。圏央道の整備により、首都圏の道路交通の円滑化、沿線都市間の連絡強化と、沿線の地域づくりの支援・活性化、災害時などの代替路としての機能、年間CO₂の削減など環境改善といった役割を担う。千葉県内の全体延長は約95kmである。

千葉県区間のうち、茂原・長南IC～木更津IC間は28.4kmで、平成元年8月に基本計画区間となり、平成7年3月に都市計画が決定され、平成9年2月には整備計画区間となった。平成10年度から用地買収が開始され、平成12年度から工事が着工された。このうち、木更津JCT～木更津東IC間(約7.1km)は平成19年3月に開通した。

事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては、国土交通省千葉国道事務所及び関係諸機関と千葉県教育庁生涯学習部文化財課が協議した結果、事業計画の変更が難しいことから、止むを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。国土交通省は、千葉県教育委員会の指導により、調査機関の指名を受けた公益財団法人千葉県教育振興財団(財団法人千葉県文化財センター(平成23年度まで))と委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

千葉県内の圏央道建設事業の内、神崎IC～大栄JCT間が常総国道事務所、大栄JCT～松尾・横芝IC・東金IC～木更津JCT間が千葉国道事務所が担当し、一時期東金IC～茂原北IC間は東日本高速鉄道株式会社を担当しており、3事業として進められた。東金IC～木更津東IC間の発掘調査は平成23年度に終了し、平成25年に開通し、平成26年度までに調査報告書が25冊刊行されている。平成27年度からは、東金～木更津間の残る整理作業～報告書刊行を一括して首都圏中央連絡自動車道(東金～木更津)に伴う埋蔵文化財調査として実施している。

本書で報告する市原市大和田遺跡群(3)・(7)、高滝陣屋跡は、茂原北IC～木更津東JCT間の中間地点にあたる。調査組織・発掘調査期間・担当者などは以下のとおりである。

(発掘調査)

平成21年度

調査研究部長 大原正義

中央調査事務所長 折原 繁

大和田遺跡群(3)

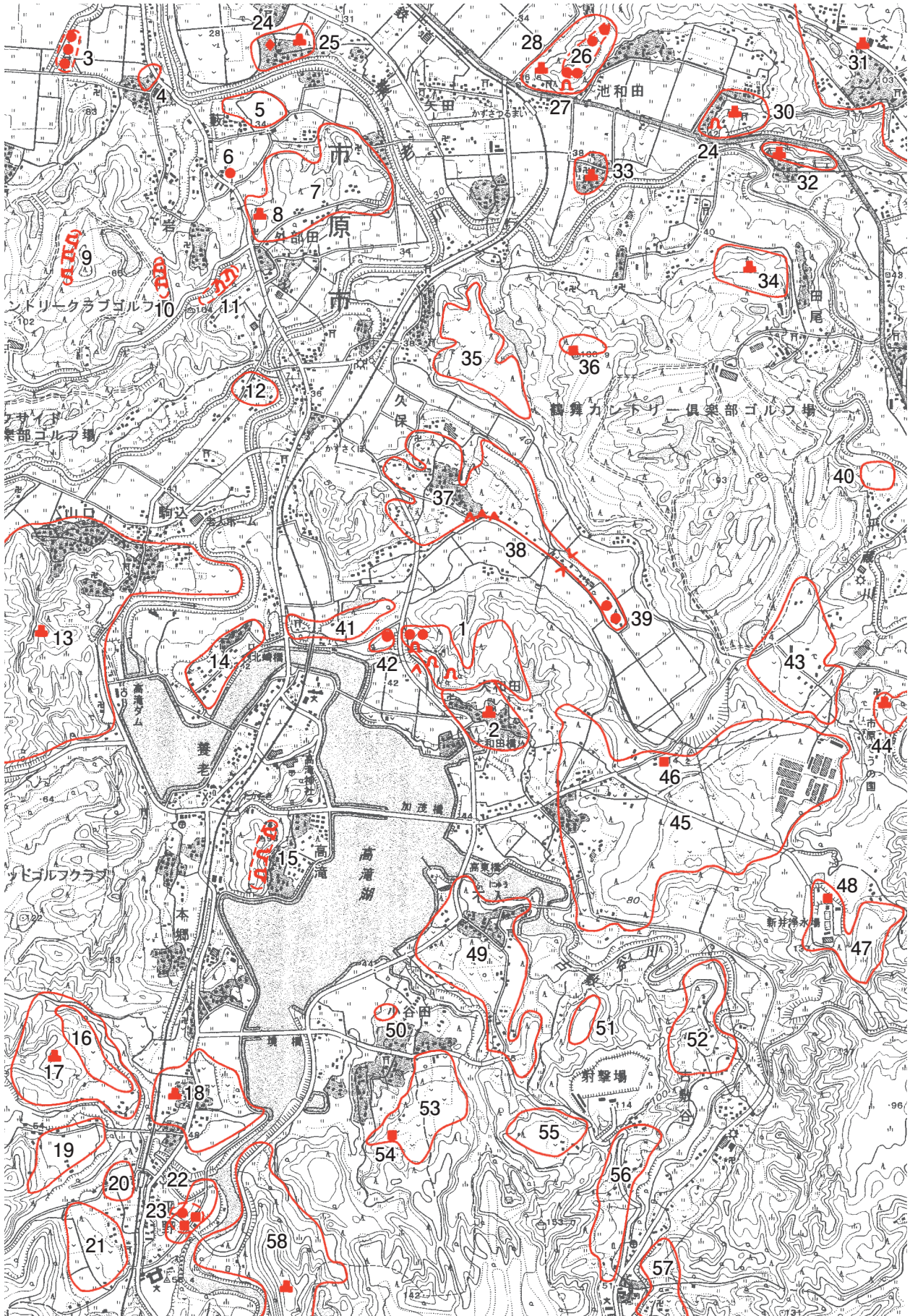
調査期間 平成21年11月1日～平成22年2月25日

調査面積 (規模) 2,430㎡ (確認調査) 上層120㎡ / 2,430㎡
(本調査) 上層1,242㎡ (古墳1基・塚1基)

調査担当者 上席研究員 鶴沢正則

平成22年度

調査研究部長 及川淳一



第1図 大和田遺跡群・高滝陣屋跡の位置と周辺遺跡

中央調査事務所 所長 白井久美子

大和田遺跡群(7)

調査期間 平成23年1月6日～平成23年3月29日

調査面積 (規模) 11,000㎡ (確認調査)上層1,100㎡／11,000㎡

(本調査)古墳時代横穴2基・中近世やぐら1基・近世以降炭窯3基

調査担当者 上席研究員 森本和男

平成23年度

調査研究部長 及川淳一

中央調査事務所 所長 白井久美子

大和田遺跡群(7)

調査期間 平成23年4月5日～平成23年6月21日

調査面積 (規模)横穴3基 (本調査)横穴3基

調査担当者 上席研究員 森本和男

高滝陣屋跡

調査期間 平成23年6月14日～平成23年6月24日

調査面積 (規模) 1,670㎡ (確認調査)上層126㎡／1,670㎡

調査担当者 上席研究員 矢本節朗

(整理作業)

平成26年度

調査研究部長 伊藤智樹

整理課長 今泉 潔

大和田遺跡群(7)

整理期間 平成26年3月2日～3月31日

整理内容 水洗, 注記, 記録整理, 接合等, 実測の一部, 挿図・図版の一部

整理担当者 文化財主事 山岡磨由子

平成27年度

整理課長 岸本雅人

大和田遺跡群(3)

整理期間 平成26年8月3日～9月15日

整理内容 実測の一部, 写真撮影, 挿図・図版作成, 原稿執筆

整理担当者 主任上席文化財主事 井上哲朗

大和田遺跡群(7)

整理期間 平成27年4月1日～7月31日

整理内容 水洗, 注記, 記録整理, 写真撮影, 挿図・図版作成, 原稿執筆

整理担当者 主任上席文化財主事 井上哲朗

高滝陣屋跡

整理期間 平成27年9月16日～平成27年10月15日
整理内容 水洗, 注記, 記録整理, 写真撮影, 挿図・図版作成, 原稿執筆
整理担当者 主任上席文化財主事 井上哲朗

2 調査概要(第2図)

大和田遺跡群(3)

平成22年度末, 調査区西部に2基の円墳が存在すると想定し, それ以外の地区で上層確認調査を実施したが, 遺構・遺物は検出されなかった。旧石器時代については, 斜面部であるため対象外であったが, 上層確認調査の際に関東ローム層が検出されたため部分的な試掘を実施したが, 検出されなかった。調査の結果, 2基の円墳は, 直径約20mの古墳時代円墳1基と直径約8mの近世塚1基と判断した。いずれも遺構に伴う遺物は出土せず, 詳細な時期等は不明である。

大和田遺跡群(7)

南向きの急斜面地を対象に2回に分けて発掘調査を実施した。平成22年度調査では, 古墳時代横穴6基(内, 中世やぐら1基, 近世・近代炭窯3基に改変), 平成23年度調査では古墳時代横穴3基が調査され, 2地点で古墳時代横穴9基(内, 中世やぐら1基, 近世・近代炭窯3基に改変)とされたが, 整理作業の結果, 古墳時代横穴5基, 中・近世やぐら状遺構1基, 近世・近代炭窯3基と判定した。

高滝陣屋跡

平成23年度, 同遺跡範囲が事業範囲がかかる範囲の内, 中央部を除く東西地区について, 上層確認調査を実施した。下層については, 丘陵裾部の緩斜面地で関東ローム層も残存していないため, 確認調査の必要はないと判断された。上層確認調査の結果, 近世以前の遺構は検出されず, 遺物は表土で見つかった近世陶磁器のみであった。残る事業範囲内にも上下層ともに遺構・遺物が存在する可能性が薄かったため, 同地区の調査は終了した。

第2節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境(第1・2図, 図版1)

遺跡の所在する市原市は, 千葉県北部から続く下総台地と房総半島の大部分を覆う上総丘陵にまたがり, その中心部を養老川が南北に貫く地形となっている。市原市北部から中部域に及ぶ下総台地は, 小河川によって開析された小規模な平坦面とそれを取り巻く斜面地からなる。上総丘陵で端を発した養老川は湧水や小河川を集めて五井から東京湾へと流れ下っており, 上流域では切り立った溪谷, 中流域では段丘状の地形を, 下流域では自然堤防を伴う低地を形成している。

大和田遺跡群は, 養老川の中流域, 高滝湖北東の独立に近い丘陵に所在する。丘陵の標高は東側が94m, 北西側では82mであり, 西側の稜上は北から流れ込んだ「新谷の池」に隔てられ, 2つの高台が形成されている。また, 高滝陣屋跡は, 丘陵南側の標高50m前後の緩斜面部～平坦地に立地する。

周辺の地質は上総層群の笠森層, 長南層, 万田野層が北東-南西に帯状に並び, 万田野層の北東部では三者がモザイク状に混在する。大和田遺跡群(7)検出の横穴群は笠森層の軟質砂岩でできた崖斜面を穿って造営されており, やぐら状遺構から出土した礫は万田野層から持ち込まれたものと推測される。



第2図 大和田遺跡群周辺地形図(1)

0 200m
 X = 71.5km
 (1/5,000)



2 歴史的環境(第1～3図)

本書で検出された遺構・遺物の時期を中心に、周辺部の遺跡や歴史の状況について概観することとする。以下の本文中に()で示した番号は、第1図に示した遺跡の番号に一致する¹⁾。

旧石器時代は、圏央道建設に伴う大和田遺跡群(1)、柏野遺跡(45)の発掘調査で、石器集中地点が検出され、特に柏野遺跡では44か所と多く検出された²⁾。

縄文時代は、大和田遺跡群(1)・藪原田遺跡(4)・外辺田遺跡(7)・番後台遺跡(14)・田野々遺跡(19)・上平野遺跡(21)・皿郷田茂遺跡(22)・諏訪坂遺跡(26)・鶴舞遺跡(31)・沢ノ上遺跡(40)・久保堰ノ台遺跡(41)・山小川遺跡(43)・柏野遺跡(45)・花和田遺跡(47)・愛宕遺跡(49)・大口遺跡(51)・林遺跡(52)・中ノ台遺跡(53)等で、全体に分布する。近辺では久保堰ノ台遺跡で中期～後期の集落が検出されている³⁾。

弥生時代の遺跡は少ないが、番後台遺跡(14)で中期の集落が検出されている⁴⁾。

古墳時代は、集落が下駒込遺跡(12)・番後台遺跡(14)・田野々遺跡(19)・堂ノ前遺跡(20)・諏訪坂遺跡(26)・鶴舞遺跡(31)・不入遺跡(37)・山小川遺跡(43)・柏野遺跡(45)・愛宕遺跡(49)・林遺跡(52)、古墳が大和田遺跡群(1)・藪八幡神社古墳群(3)・皿郷田茂遺跡(22)・池和田古墳群(26)・大和田新谷古墳群(39)・緑岡古墳群(42)、横穴が大和田遺跡群(1)・藪横穴群(9)・岩横穴群(10)・宮原横穴群(15)・外辺田ヤツ横穴群(11)・池和田横穴(27)・池和田城横穴(29)・緑岡古墳群(42)である。第1図内では、大和田遺跡群より北部の台地上に古墳群、周辺部丘陵に横穴群が分布する傾向がある。近接地では、緑岡古墳群で古墳3基・横穴16基が調査されている⁵⁾。

奈良・平安時代は、藪マギノウ遺跡(5)・藪横穴群(9)・岩横穴群(10)・不入遺跡(37)・永田・不入窯跡群(38)・山小川遺跡(43)・新井代遺跡(57)であり、奈良時代にも横穴が形成されるが、山間部であるため、永田・不入窯という上総国分寺を中心に広く供給された著名な須恵器窯跡はあるが、集落遺跡は少ない状況である。

中・近世は、城館跡が高滝陣屋跡(2)・御園生館跡(8)・山口城跡(13)・本郷明金城跡(17)・本郷堀ノ内館跡(18)・下矢田城跡(25)・大宮部田城跡(28)・池和田城跡(30)・鶴舞城跡(31)・岩井戸砦跡(32)・光明寺館跡(33)・陣馬台砦跡(34)・山小川城跡(44)・大羽根城跡(58)と密度濃く分布している。戦国時代は長南武田氏に属した多賀氏が池和田城を本城としていたが、房総に侵攻した後北条氏と安房の里見氏との領土紛争の地であった。第1図に掲載した各城館跡の殆どに城郭遺構や城郭関連地名が残存しているが、近世陣屋に関しては範囲を含めて不明な部分が多い⁶⁾。集落とみられる中世遺物散布地は作尻遺跡(35)・小滝遺跡(40)・愛宕遺跡(49)・林遺跡(52)・下根遺跡(56)、生産遺跡は鋳物師による金谷製銅跡(24)、塚は浅間塚(6)・長塚台三山塚(36)・神山塚(46)・中ノ台行人塚(54)等があり、中世以降は当地域でも開発が深く及んでいたようである。

圏央道建設に伴う大和田遺跡群の発掘調査では、大和田遺跡で縄文時代土坑・炉穴、大和田遺跡群(1)は遺構なし、(2)は横穴2基、(3)は古墳1基・塚1基、(4)・(5)は旧石器時代遺物集中地点、(6)は縄文時代陥穴、(7)は横穴5基・中近世やぐら状遺構1基が検出されている⁷⁾。

高滝陣屋跡については、文献史料(『新訂寛政重修家譜』)で、高滝藩及び藩主板倉氏の歴史がある程度記述されており、『市原市史』等でまとめられているので、ここに詳細に記すこととする⁸⁾。

高滝藩主板倉氏は、清和源氏義家の系譜を有し、初代藩主重宣は当時三河中嶋藩主であった重矩の嫡子重良の実子として寛文4(1664)年に生まれた。父重良は病気のため寛文年間に廃嫡となったので、代わっ

て嫡子となった叔父重種のもとで養育された。重矩は、寛文11（1671）年転封となり下野国烏山5万石の藩主となったが、さらに重種は元和元（1681）年転封となり、武蔵岩槻6万石の藩主となった。この間、重種は延宝5（1677）年奏者番兼寺社奉行を経て、同8年には老中に昇進し、五代將軍綱吉の幕閣に列した。元和元年には西域の老中となったが、同年11月、不都合があつて免職の上、逼塞に処せられた。翌年には1万石の減封となり、信濃坂木5万石の藩主として依然蟄居を命じられた。天和3（1683）年5月には重種が、幕府に対して封地を返上したい旨願ひ、幕領のうち3万石は嫡子重寛に2万石は甥重宣に分知して相続することを許された。重宣は、上総市原郡の高滝を居所としたので、ここに高滝藩が誕生した。

幕領は、上総市原、信濃伊奈・佐久の3郡において2万石あつたが、市原における藩領村々については文政10（1827）年の「高滝御地頭替り年数」（市内高滝宮原家文書）が知ることのできる唯一の史料である。それによれば、大和田村・平野村・大戸村・万田野村が高滝藩領とされているが、「元禄郷帳」で総高を推計すると750石余でしかなく、このほか多数の村々が未詳のままである。

初代藩主重宣は、高滝2万石に新封された天和3（1683）年閏5月に江戸城の定席を菊間の広縁にされたが、翌貞享元（1684）年8月没している。次代の重高は末期養子となったものであり、同年10月家督を継ぎ、將軍綱吉から父の遺物である一文字の脇差を献上した。こののち半年間隔で高滝と江戸の間を参勤交代したと思われる。元禄12（1699）年2月、重高は備中加陽・都宇・小田の3郡に転封となり、居所を加陽郡庭瀬（現岡山県岡山市）に移したので廃藩になった。

高滝藩に設けられた居所は、陣屋であつたと考えられ、それも参勤交代の便宜のため、藩領のうち最も江戸に近い市原が選択されたものとみなされる。ただし、居所を高滝に創設したと記してあるのは、板倉氏の提出した家譜によつた『寛政重修家譜』のみであり、その所在地として大和田村が有力視されている。

その後、高滝陣屋及び光厳寺については、小幡重康氏による「続板倉伝記」の紹介によつて詳細が明らかになされた⁹⁾。延宝8（1680）年、大和田村にあつた本覚院が約7.5km南方の田淵村へ、田淵村の光厳寺が大和田村へ移された。元禄7（1694）年、重高は休暇で江戸から領地の上総国高滝郷へ初入国したが、陣屋がないために大和田の真言宗光厳寺を宿陣としているが、8月には大阪加番を命ぜられる。また、同9（1696）年には、再び休暇で高滝郷光厳寺を宿陣としている。現在の光厳寺は本堂も境内も小規模であるが、明治時代中期には本堂は縦11間・横7間、ほかに庫裏や鐘撞き堂もあり、境内約900坪のほか、山林など多数持っていた大寺であつたということであり、そこが宿陣とされたということである。

そして、近年は平成2（1990）年、高滝ダムの完成によつて、養老川と沖積地の耕地景観は一変した。

注

1 第1図の遺跡分布図は、主に下記文献を基に作成した。

千葉県教育委員会 1999『千葉県埋蔵文化財分布地図(3) - 千葉市・市原市・長生地区(改訂版) -』

2 (公財)千葉県教育振興財団 2014『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書22 - 市原市柏野遺跡 -』

3 (公財)千葉県教育振興財団 2013『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書21 - 市原番後遺跡・山口城跡・大和田遺跡群 -』 なお、久保堰ノ台遺跡の報告書(『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書29)は平成27年度刊行予定である。

4 (財)千葉県文化財センター 1982『市原市番後遺跡・神明台遺跡』

5 (財)市原市文化財センター 1988『大和田遺跡』、(公財)千葉県教育振興財団 2016『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財



第3図 大和田遺跡群周辺地形図(2) (迅速測図 1/25,000)

調査報告書28－市原市緑岡古墳群1・1－2－』（平成27年度刊行）

- 6 千葉県教育委員会 1996『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域－』
小高春雄 1999『市原の城』私家本, 小高春雄ほか 2013『研究紀要28』（公財）千葉県教育振興財団
- 7 大和田遺跡・大和田遺跡群(1)・(2)：『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書21』（注3と同書）
大和田遺跡群(4)・(5)・(6)：『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書27』（平成27年度刊行）
大和田遺跡群(3)・(7)：『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書31』（本書）
- 8 西脇 康 1983「近世市原の領主変遷と所領配置」『市原の歴史と文化財』市原市教育委員会
西脇 康ほか 1986『市原市史(中巻)』市原市
- 9 小幡重康 1992「高滝藩に陣屋はなかった」『上総市原』第8号 市原市文化財研究会

第2章 大和田遺跡群(3)

第1節 調査概要 (第2・4図, 図版2)

大和田遺跡群については、調査開始時点から世界測地系XY座標を元に全体に20m四方の大グリッド網が設定された。大グリッドの名称を北から南へアラビア数字が、西から東へアルファベットが配列され、大グリッド内を、2m四方の小グリッドで東西南北に10区画ずつ分割して全体が100等分された。小グリッドの名称は、北西隅を00とし、東へ00, 01, 02…と1の位を増し、南へ00, 10, 20…と10の位を増して、00～99の小グリッドを設定した。地点を特定するために大グリッドと小グリッドを組み合わせて、3F-16などと表記している(第5図ほか)。遺構・遺物番号は基本的に調査時に付したものを踏襲した。

大和田遺跡群(3)の調査対象範囲は、標高70m～80mの台地及び丘陵の縁辺部から斜面にかけてであり、西方に2基の古墳または塚の存在が確認されていたため、東部を中心にマウンド部分以外で幅2mのトレンチにより、部分的には関東ローム層の下層確認調査も含めて上層確認調査実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。2基の円墳については、両者の中心部を通すトレンチを設定し、さらにマウンド部分でそれに直行するベルトを設定した。表土除去後ベルトを残し周囲の盛土を下げた。その結果、直径約20mの古墳時代円墳1基と直径約7mの近世塚1基と判断した。いずれも確実に遺構に伴う遺物は出土せず、古墳の主体部も判然とせず、詳細な時期等は不明である。

第2節 遺構と遺物

1 古墳

SM-1 (第1・6～8・10図, 図版2～5, 7～10・19)

調査前の頂部の標高は83mである。東側に南北側の斜面に通ずる形の凹みがあり、古墳の周溝に推定されたが、それ以外の地区の周溝は不明であった。頂部から東側の周溝の外側肩までは約10mであった。

ベルトによる土層観察の結果、ブロック状の土を混入する土砂によって、周溝内側の周縁部にドーナツ状に最大高さ約1.0mの盛り土をした後に内部に土を積んでいく手法が明らかとなった。盛土除去の結果、東西方向では、長さ約12.0mの地山を残し、両側に周溝が検出された。東側の周溝は上端で幅5.5m、下幅約1.2m、深さ0.6m～0.7mである。西側は地山が緩斜面であるが、斜面内に上幅2.5m・下幅約1.2m、深さ0.2m～0.5mの浅い溝が造られていた。盛土及び覆土の区別が調査時には不明瞭であったようであるが、マウンド部分の直径は約12.0m、周溝の外側を含めて直径約20.0m、盛土の高さ1.8mの円墳である。

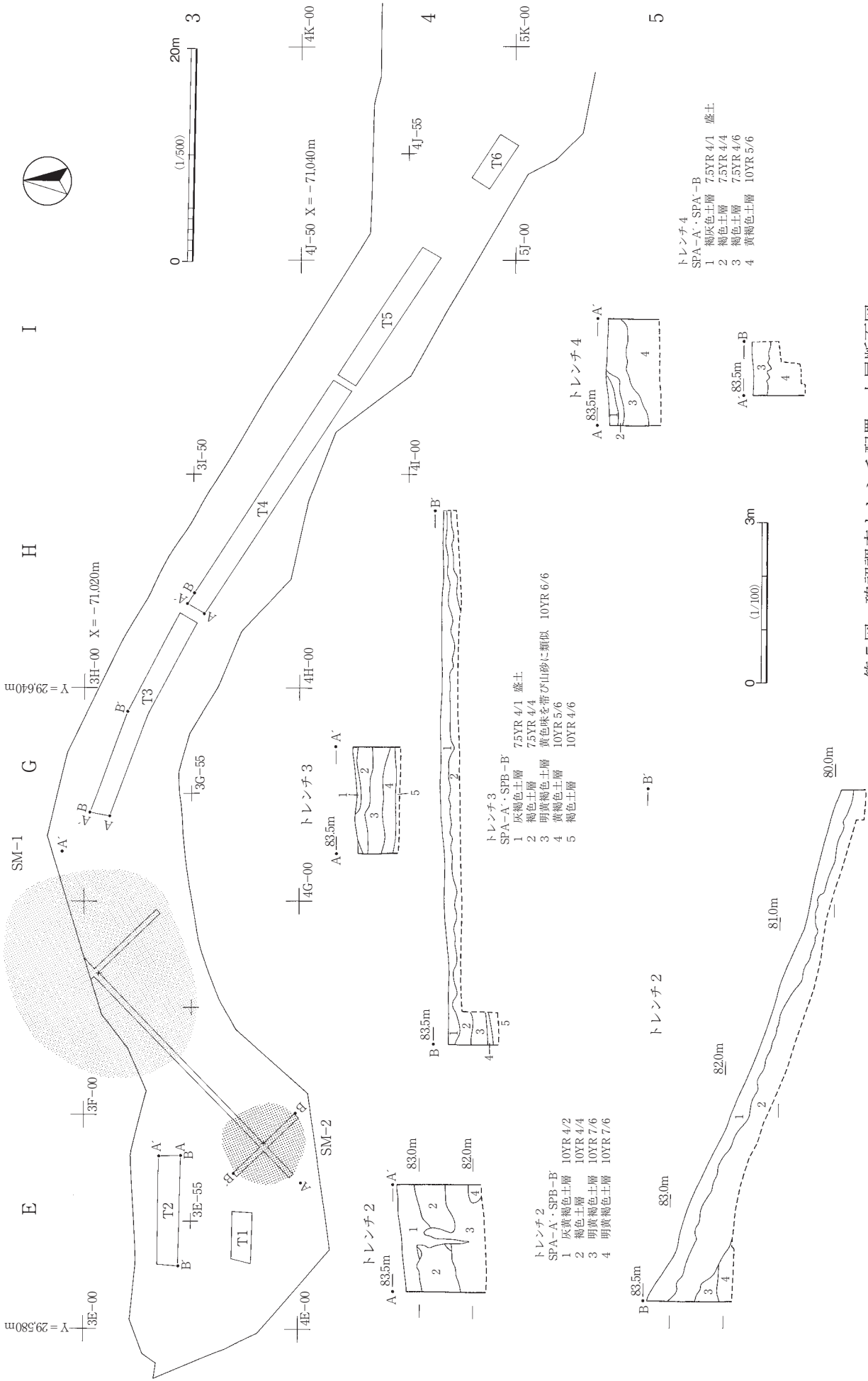
遺物は、盛土内から出土した土師器甕片のみである(第10図1, 図版19)。焼成が粗悪で整形等は不明である。

SX-2 (第7図, 図版9)

盛土除去時に墳頂部下やや西寄りでは幅1.0m前後・深さ約0.3m、長さ3.0m以上の溝状遺構が検出された。白色粘土粒を含む人為的落ち込みで、主体部の可能性もある。遺物は確認できなかった。



第4図 大和田遺跡群(3)周辺地形図



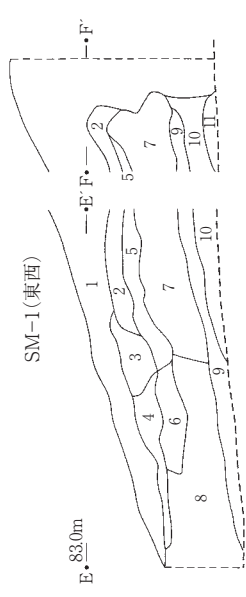
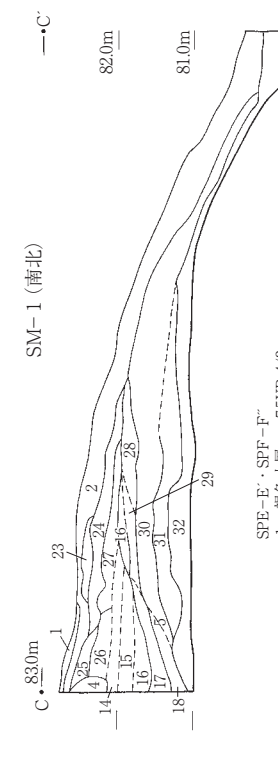
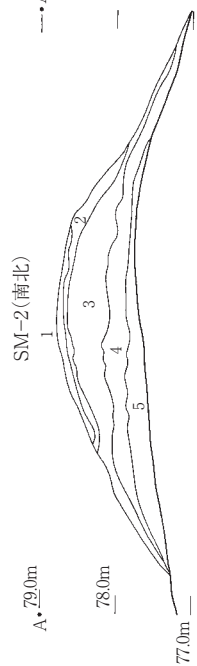
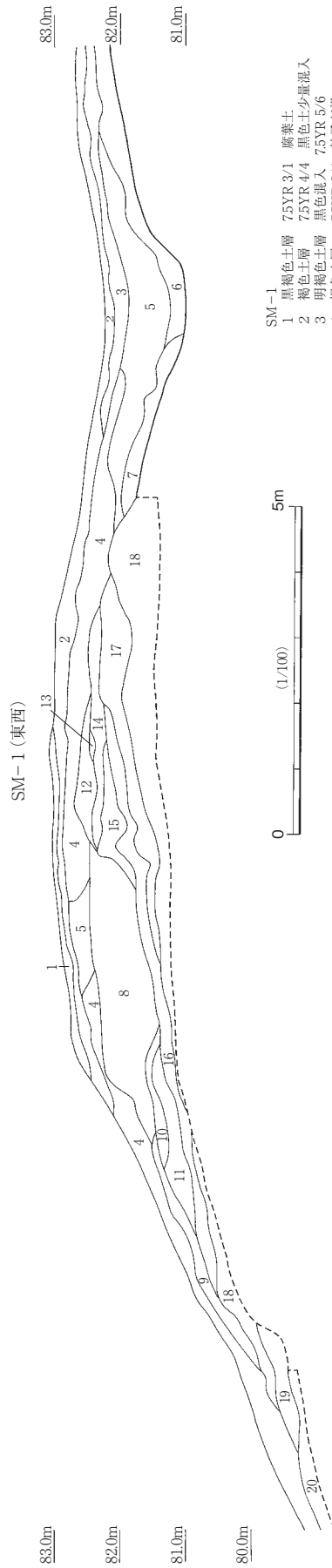
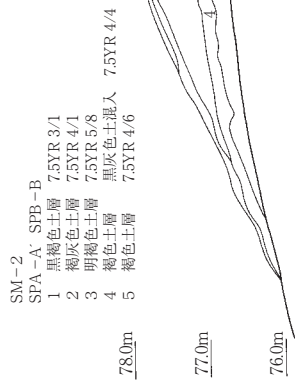
第5図 確認調査トレンチ配置・土層断面図



第6図 SM-1・2調査前地形測量図



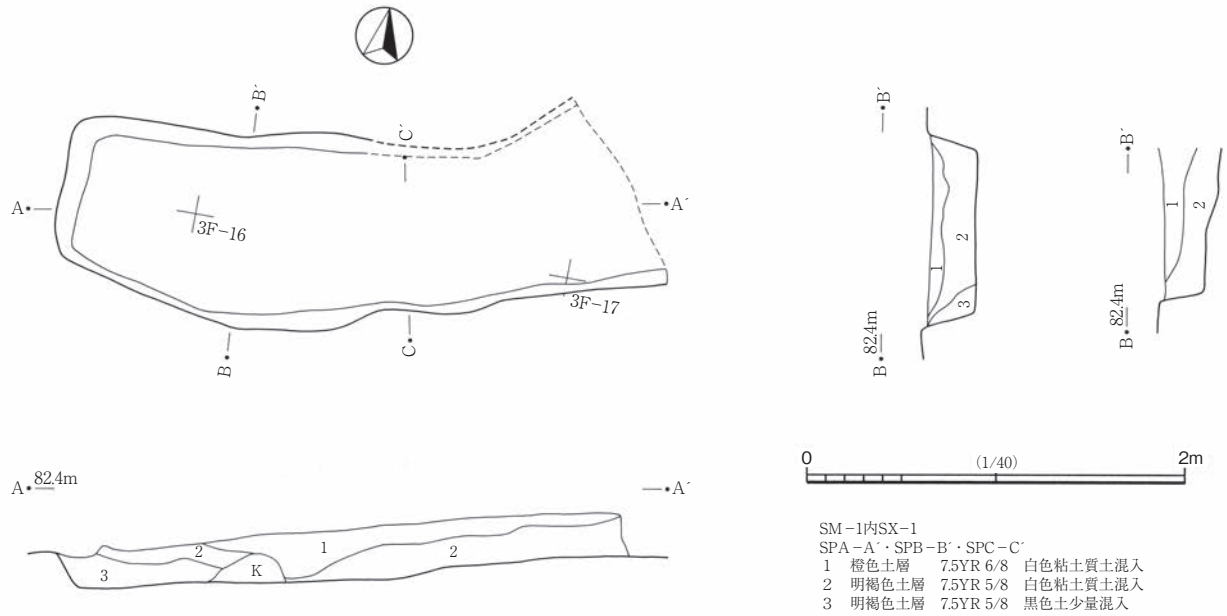
第7図 SM-1表土除去後地形測量図



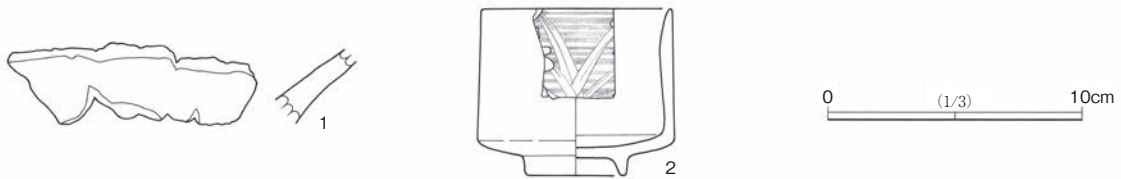
- SM-1
- 1 黒褐色土層 7.5YR 3/1 腐葉土
 - 2 褐色土層 7.5YR 4/4 黒色土少量混入
 - 3 明褐色土層 7.5YR 5/6 単色混入
 - 4 褐色土層 7.5YR 3/4 粒子が粗い
 - 5 黒褐色土層 褐色多量混入 7.5YR 3/2
 - 6 明褐色土層 黒色少量混入 7.5YR 5/6
 - 7 明褐色土層 黒褐色少量混入 7.5YR 5/8
 - 8 明褐色土層 7.5YR 5/6
 - 9 褐色土層 7.5YR 4/4 粒子粗い
 - 10 明褐色土層 7.5YR 5/6 岩盤フロッツ混入
 - 11 明褐色土層 黒色少量混入 7.5YR 5/6
 - 12 明褐色土層 7.5YR 5/6 砂中固所に粘土質土混入
 - 13 明褐色土層 黒色少量混入 7.5YR 5/6
 - 14 明褐色土層 黒色少量混入 7.5YR 5/6
 - 15 明褐色土層 7.5YR 5/6 粘土質土少量混入
 - 16 明褐色土層 単色混入 7.5YR 5/6
 - 17 明褐色土層 明赤褐色混入 7.5YR 5/8
 - 18 明褐色土層 7.5YR 5/6~5/8 丸石多量、糖・白色砂粒混入
 - 19 明褐色土層 7.5YR 5/6 粗い、鉄分混入
 - 20 明褐色土層 7.5YR 5/8 黒灰色土混入 7.5YR 4/4 丸石混入
 - 21 明褐色土層 7.5YR 5/6 赤褐色土混入
 - 22 褐色土層 黒色土少量混入 7.5YR 4/3
 - 23 褐色土層 7.5YR 4/3
 - 24 明褐色土層 7.5YR 5/6 粘土質土混入
 - 25 明褐色土層 7.5YR 5/6 粘土質土混入
 - 26 明褐色土層 7.5YR 5/6 粘土質土混入
 - 27 明褐色土層 7.5YR 4/4 粘土質土混入
 - 28 明褐色土層 黒色土少量混入 7.5YR 5/8
 - 29 明褐色土層 黒色土多量混入 7.5YR 5/8
 - 30 明赤褐色土層 黒色土少量混入 7.5YR 5/8
 - 31 明褐色土層 7.5YR 5/8
 - 32 明褐色土層 7.5YR 5/6

- SPE-E・SPF-F
- 1 褐色土層 7.5YR 4/3
 - 2 明褐色土層 7.5YR 5/6
 - 3 明褐色土層 7.5YR 5/6 (根の攪乱)
 - 4 明褐色土層 7.5YR 5/6 褐色土混入、粘土質
 - 5 褐色土層 7.5YR 6/6 浅黄褐色土混入、粘土質
 - 6 明褐色土層 7.5YR 5/6
 - 7 明褐色土層 黒色少量混入 7.5YR 5/8
 - 8 明褐色土層 浅黄褐色少量混入 7.5YR 5/8 粘土質
 - 9 明褐色土層 黒色少量混入 7.5YR 5/8 粘土質
 - 10 褐色土層 7.5YR 4/6 黒色黒色土多量混入 7.5YR 5/8
 - 11 褐色土層 7.5YR 4/6

第8図 SM-1・2土層断面図



第9図 SX-1



第10図 大和田遺跡群(3)出土遺物

2 塚

SM-2 (塚) (第6・8・10図, 図版11～13・19)

調査前, 頂部の標高は77.8mで直径約7.0mであった。十字のベルトを残し周囲の盛土を下げた。旧表土から頂部までは1.1m, 直径は約7.0m, 周溝は存在しない。盛土はSM-1の様な細かさはなく, 4層程度の大雑把な盛土である。

遺物は, 確実に当塚に伴うものはないが, 調査区内で出土した瀬戸・美濃産磁器緑釉筒茶碗(第10図2, 図版19)は, 19世紀代(江戸時代末期)の所産である。

第3章 大和田遺跡群(7)

第1節 調査概要 (第11・12図, 第1・2表, 図版14)

大和田遺跡群(7)は丘陵南面の中腹が発掘の対象であり、眼下に臨む大和田の集落との比高は約15mである。調査に先立って行われた現地踏査では急傾斜地に複数の横穴の存在を確認しており、足場を業者委託で設定しながらの確認調査並びに本調査を行った。

上層確認調査は、調査面積全体の約10%に幅2mのトレンチを任意に設定した。斜面部の横穴調査が主体であり、ローム層が確認されなかったため下層の確認調査は行っていない。

平成22・23年度調査にて横穴5基を検出した。平成22年度では3基を検出し、調査・実測作業を行っていたのだが、作業の終盤で崖面に開口した穴が発見され、引き続き翌23年度に7次調査を行った結果、大型の横穴2基を検出した。また、中世のやぐら状遺構1基、中世～近代の炭窯3基を検出した。

大和田遺跡・大和田遺跡群(2)・(3)の古墳時代の調査では、これまでに、古墳4基・横穴16基・土坑1基・須恵器窯1基が検出されており、今回の調査によって横穴5基が加えられることとなった。

第2節 遺構と遺物

1 横穴

今回調査した横穴は5基である。同一丘陵上にあり、南～南西に向かって開口している。これらは標高60m前後の崖面に造られており、丘陵下に展開する大和田の集落とは15m～17mの高低差がある。滑落の危険を回避するために足場を確保し、重機で横穴に溜まった土砂を排除しながらの作業であった。

穴1は調査区中央部の南斜面に造られているが、横穴3～6は南西にまとまって造営されている。横穴2は調査の際に炭窯と判明したため、第3項で「炭窯3」として報告した。横穴5基に共通する特徴の一つに隔壁をもたないことが挙げられ、羨道から玄室へは段差が設けられない。平面形態はそれぞれに特徴があり、棺座の位置、玄室の大きさ、遺物の有無など一様ではない。遺物は横穴1・3・5より出土している。

なお、主軸の方位は、開口方向ではなく、奥壁側を元に傾きを度数で表した¹⁾。また、遺構の計測は縦横の規模をメートル(m)、深さ、厚さと幅の一部をセンチメートル(cm)で記載した。第1表はセンチメートル(cm)で統一した。

横穴1 (第13図, 第1・2表, 図版16)

調査区域の中では最も東に位置する。調査以前より開口し、本横穴群の存在を明らかにしていた横穴であり、南斜面で南南西に開口する。他の4基とは90mほど隔たっており、1基のみが単独で存在している感がある。玄室の床面から鉄製品が出土している。

土層堆積 玄門は土砂の堆積で約1m埋没した状態であったが、玄室には30cm～50cm程度の灰～茶褐色の土が堆積していた。開口部からの流入が考えられ、奥壁付近では薄く、玄門部では厚い。

玄室 玄室の平面形は最大幅2.39m・奥行2.49mで、ほぼ正方形である。側壁・奥壁からの立ち上がりは明瞭で、側壁はほぼ垂直に、奥壁は床面上部3cmほどの位置で若干奥に膨らみながら内湾して立ち

第1表 大和田遺跡群(7)遺構一覧

遺構番号	主軸 (奥壁側を北)	玄室		段差	時期	備考
		平面形状	断面形状			
横穴1	N-12°-E	方形	平型(台形)	無	古墳時代後期	十字の排水溝。40号横穴に近似。鉄製品出土。6世紀後半。
(横穴2)						炭窯3に変更。
横穴3	真北	長方形	ドーム型	無	古墳時代後期	他4基に比し羨道短。
横穴4	N-66°-E	隅丸方形	アーチ型	無	古墳時代後期	左棺座。排水溝。6世紀後半。
横穴5	N-30°-E	方形	アーチ型か	無	古墳時代後期	奥高棺座。玄室奥行4.7m。
横穴6	N-43°-E	方形	不明	無	古墳時代後期	横穴5を切る。
やぐら状遺構	-	矩形	-	-	中世	ピット5基, 上屋を想定。鉄・石製品出土。
炭窯1	N-23°-W	-	-	-	中世~近代	やぐら状遺構を切る。遺物なし。
炭窯2	N-18°-E	-	-	-	中世~近代	遺物なし。
炭窯3	N-63°-E	-	-	-	中世~近代	調査時横穴2。遺物なし。

あがる。玄室の天井形は平型である。右側面の中ほどには幅10cmほどの工具痕が斜位に認められるが、左側面・天井部では掘削の規則性は感じられない。床面は硬質で平坦である。

壁際と床面に溝が廻る。玄室を俯瞰すると溝が床面を四分するように見えるが、中心部では幅広の矩形となる。溝幅は10cm~18cm、深さは5cm~10cmほどである。床面は玄門部に向かってわずかに傾斜しており、排水の意図を感じさせる。玄室の中ほどを奥壁寄りに横に走る溝は、左壁面近くでは高低差がなくなる。溝は羨道部へと導かれ、一旦、玄室中央部と同じように矩形に広がるが、地形の傾斜と共に消滅する。

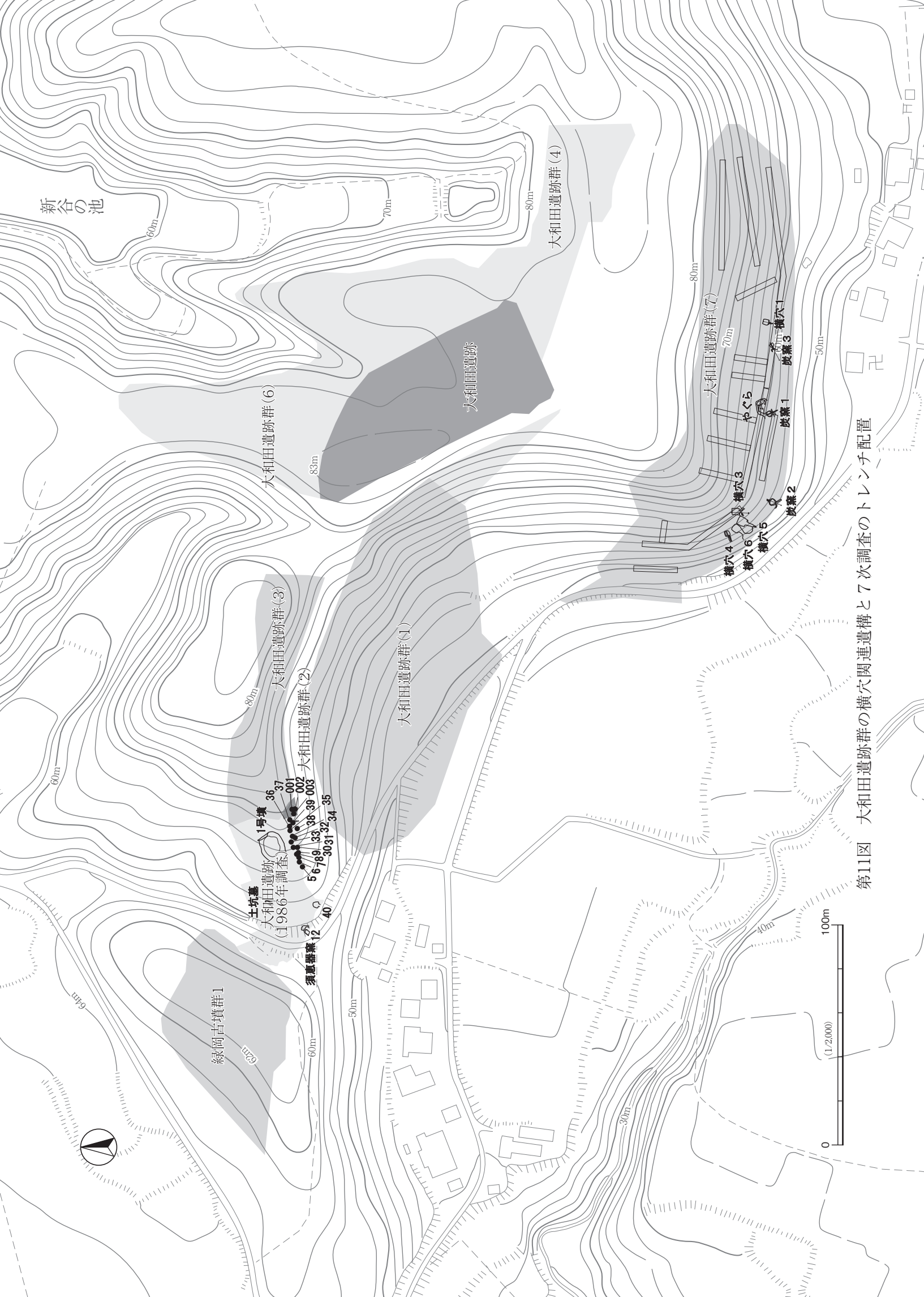
なお、玄室が正方形を呈し、溝が十字あるいはT字に残る横穴は市原市大和田遺跡40号・長南町久原B横穴・茂原市猿袋3号横穴・睦沢町長楽寺D横穴群7号横穴が報告されている²⁾。

羨道 羨道は、約1.3mが遺存していると思われる。隔壁はなく、羨道から玄室の高さは変わらない。羨道の幅は玄門部で0.78mである。

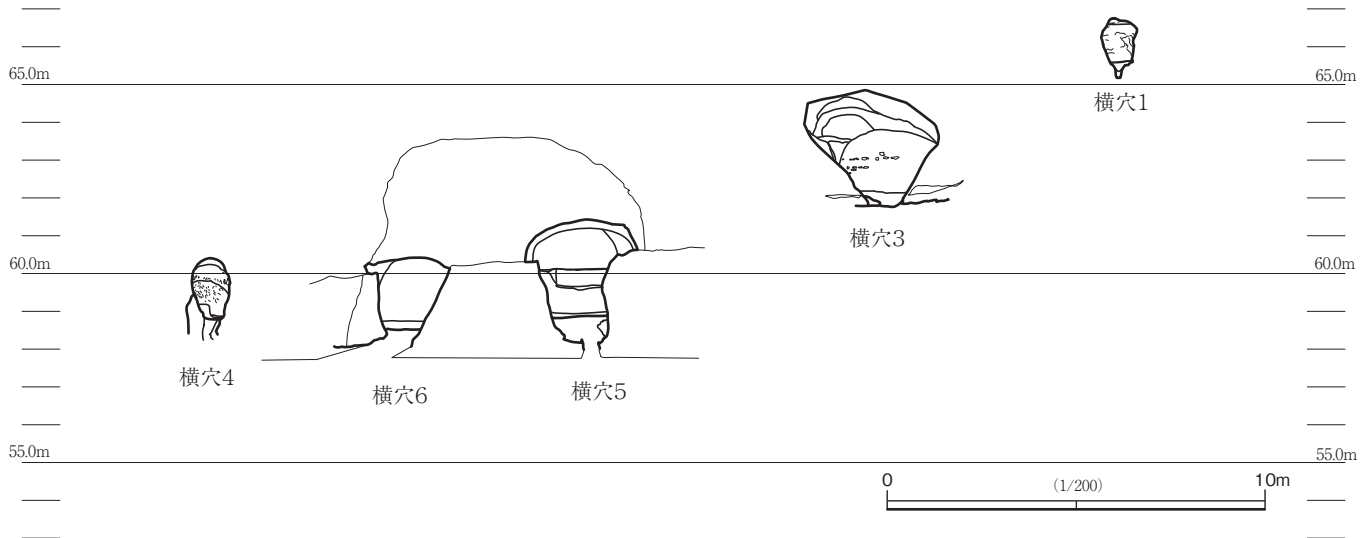
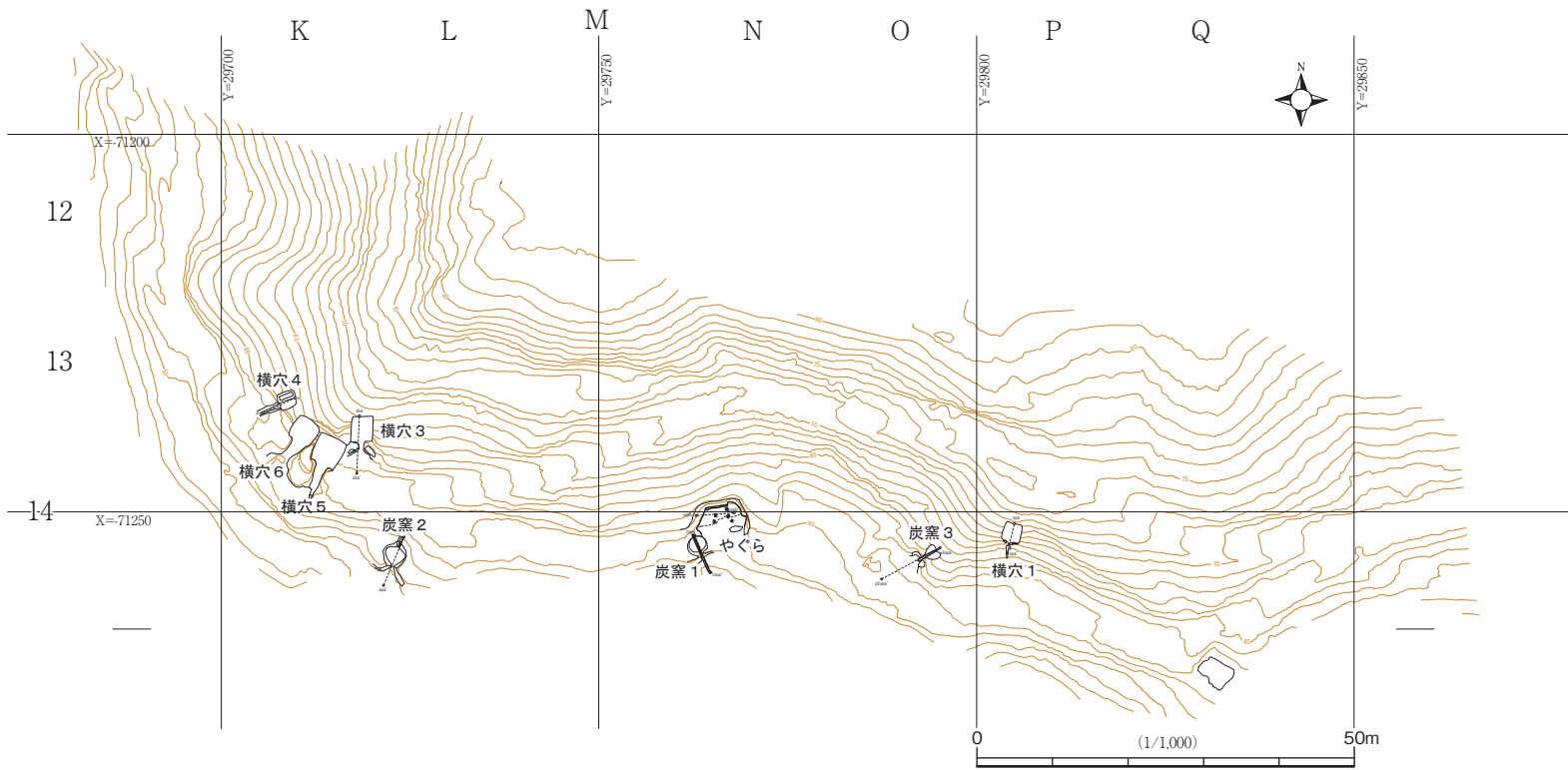
前庭部 削平された台地斜面部にあたり、完全に失われている。

遺物 (第13・14図, 第3・4表, 図版21・22) 遺物の多くは玄室の中央部より羨道側に分布し、北西隅と玄門付近にも2~3点出土している。ほとんどが鉄製品であり、床面上の茶褐色土より検出された。出土位置が明確な遺物は41点だが、一括資料の中には鉄鏃複数が癒着した状態で出土したもの、崩れた状態のものが散在し、副葬された原位置を留めていないと推測される。

1は直刀の刃先付近, 2~6は刀子で, 3・5・6は中茎が残存する。7~32は鉄鏃である。基本的には、鑿形刃部・棒状部・茎部からなるタイプで、刃部~棒状部~茎部の順に並べた。7~11・15は刃部と棒状部分の段差(関)が明瞭, 12~14・17は不明瞭, 18~27は棒状部分, 28~32は茎部である。17は5本が癒着している。時期的には6世紀代のものと考えられる³⁾。



第11図 大和田遺跡群の横穴関連遺構と7次調査のトレンチ配置

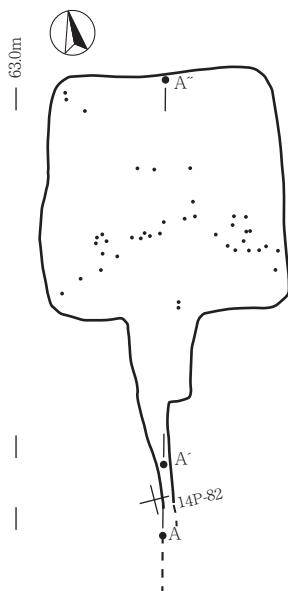
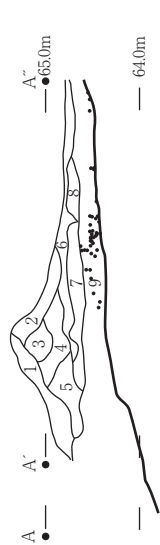
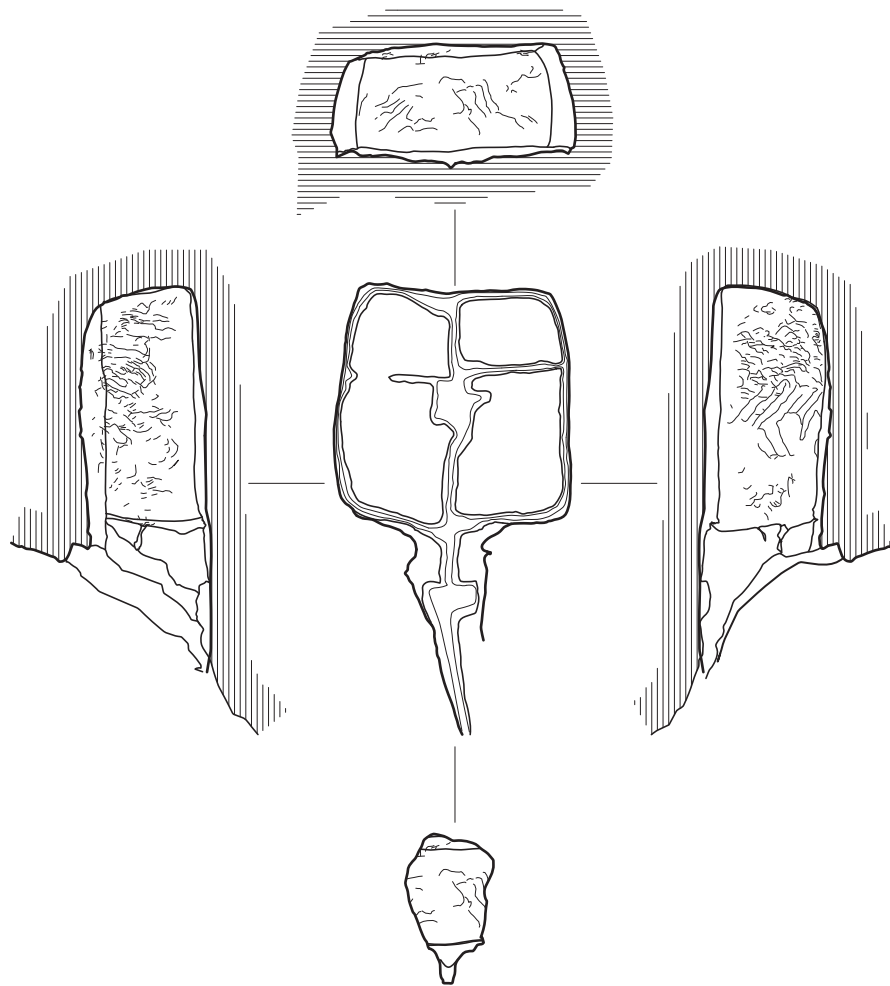


第12図 横穴分布状況

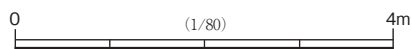
第2表 横穴計測表

(括弧内数字は推定・現存値 単位: cm)

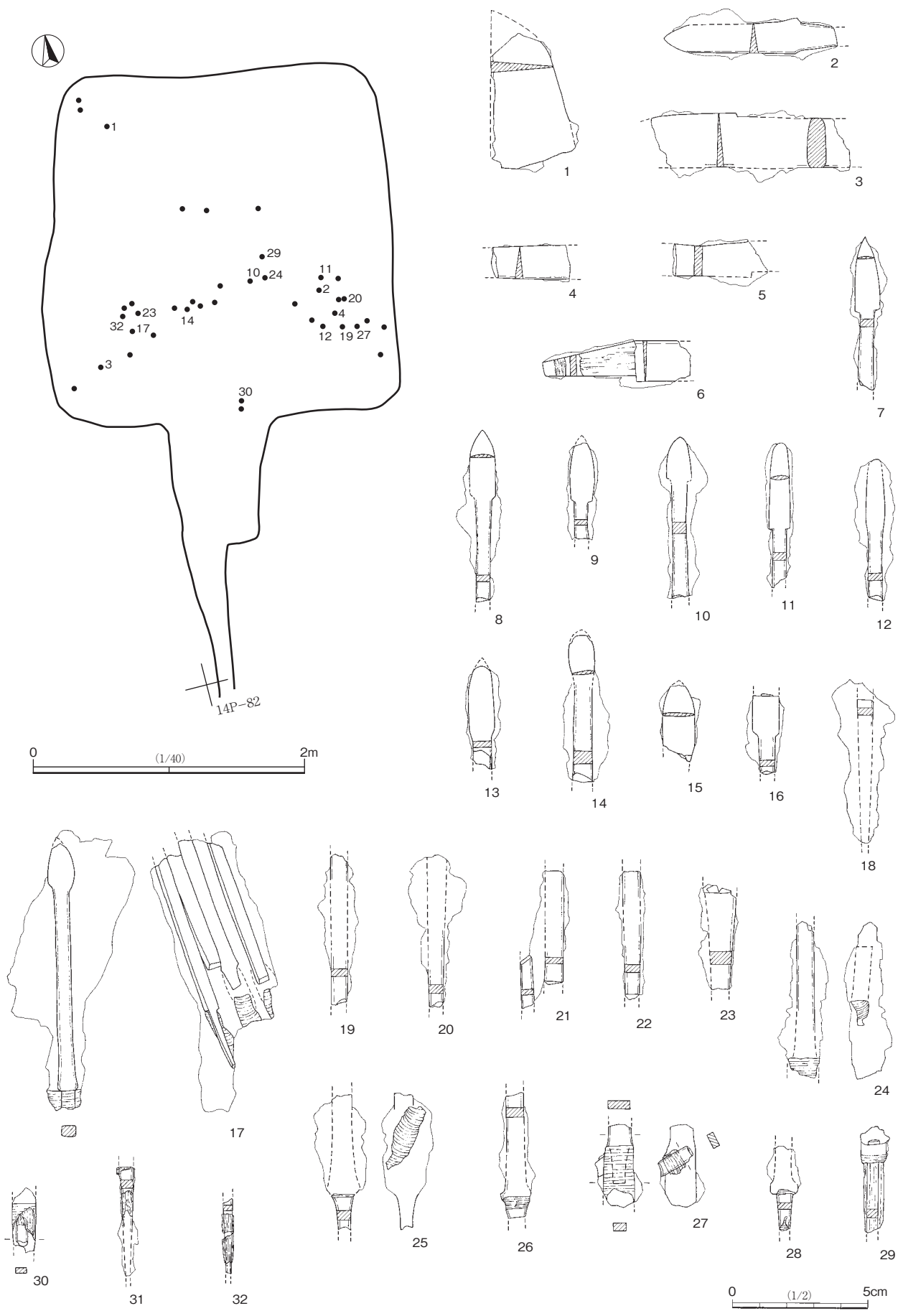
遺構番号	玄室	玄室	玄室	玄室	玄室	羨道	羨道	羨道	備考
	最大幅	奥幅(A)	前幅(B)	奥行(C)	高(D)	奥幅(E)	中幅(F)	羨道長(G)	
横穴 1	239	200	239	249	121	69	82	(220)	十字の溝
横穴 2									炭窯 3 に変更
横穴 3	289	270	272	330	260	112	61	120	左棺台
横穴 4	230	180	212	239	143	90	90	320	左棺座
横穴 5	390	370	320	473	(270)	194	120	450	奥高棺座
横穴 6	350	310	290	330	(180)	220	150	255	小型壺



- 1 表暗褐色土 表土 竹根多い
- 2 暗褐色土 表土
- 3 暗灰褐色土 天井崩落土 やや粘性あり
- 4 暗褐色土 やや粘性あり
- 5 灰褐色土 崩落土
- 6 灰褐色土 わずかに茶褐色を帯びる
- 7 黒褐色土 茶褐色の小塊含む
- 8 灰茶褐色土
- 9 茶褐色土



第13図 横穴 1



第14図 横穴1出土遺物

第3表 金属製品計測表1(鉄製直刀・刀子)

単位: mm []現状値, ()推定値

挿図番号	遺構	遺物番号	現存長	刃部長	刃部幅	背幅(厚)	茎長	茎幅	茎厚	現存重量	実測番号	備考
14図-1	横穴1	018	[49.5]	[49.5]	30.5	4.0				15.62	21	直刀
2	横穴1	026	[63.0]	[49.5]	11.5	3.5	[13.5]	10.0 7.0		10.32	25	
3	横穴1	003	[73.0]	[32.0]	19.0	2.9	[41.0]	17.5	6.9	19.74	16	
4	横穴1	030	[28.5]	[28.5]	11.5 12.5	3.5				3.82	27	
5	横穴1	001-3	[35.0]	(5.0)			[29.0]	[12.5]	3.0	5.21	3	
6	横穴1	001-1	[54.5]	[21.5]	15.0		[33.0]	13.0 5.0	3.0	8.10	1	木質残存

横穴3(第15図, 第1・2表, 図版15・16・19)

調査区域の南西に位置し、丘陵の張り出し部で真南に向かって開口する。玄室はやや縦長の角張った方形で、羨道部は短く、前庭部は広く開く。平面形はほぼ長方形であるが、左壁を削り抜いた小型の棺台がみられる。

土層堆積 土層の堆積は玄室の天井崩落部直下が最大2mの高まりがある。玄室奥部では約40cm堆積しているが、半量以上は天井部が崩れたことによる表土の流れ込みである。床面には玄室から羨道部全体に10cm～15cmの厚さで暗灰褐色土の堆積がみられ、横穴構築後から崩落するまでの間に自然堆積したものと推測される。この底面を覆う堆積の後、玄門付近の天井が一部崩れ、小山となり、羨道の崩壊によって開口部が狭められたと推測される。玄室部はこの後天井が落下し、大量の崩落土に覆われたと推測される。

玄室 玄室の平面形は最大幅2.89m・奥行3.30mと、縦長の形状である。右奥と左前壁の角部が強めに掘り込まれている。天井形態は、中央部で全体が丸く収束するドーム形と考えられる。左側壁の奥寄りには床面から1.4mほどの位置から側面奥へと掘り込まれた段が認められる。この段の長さは南北に1.8m、幅は1.5mほどで、北に半円形の奥壁をもつ。横穴3の完成後あるいはほぼ同時期に設けられた段であろう。奥壁・右側壁には地層に沿って水平に並ぶ大小の穴が認められる。人為的に穿たれたものではなく、脆い砂岩質の岩盤が地下水や微小生物などの要因で削られたことに起因する。玄室床面には周溝等はみられなかった。床面を奥壁から玄門へと緩やかに下降させることで排水機能をもたせたものと推測される。

羨道 羨道部は他の4基と較べて短く狭い。羨道の最少幅は0.61m、玄門部では1.12mと開ける。玄門部から前庭部までは1.2mである。側壁は垂直に立ち上がるが、天井部崩壊により形状は不明である。

前庭部 羨道の手前は広く開ける。両袖部の成す角度は100度で、玄室幅と同等かそれ以上の広さがあったものとみられる。奥壁から羨道、前庭部の床面はごく緩やかに傾斜するが、入口部分は遺存しておらず、全容は不明である。

遺物 横穴3から出土した遺物は、一括資料としてのわずかな土師質土器片のみであるが、中近世小型火鉢とみられ、図示した(第15図1, 図版19(1)-1)。

形状の類例としては、玄室が縦長の方形でドーム形の天井部を有し、羨道部の長さが1m内外、前庭部をもつ横穴は陸沢町東谷横穴群1号横穴が挙げられる⁴⁾。

第4表 金属製品計測表2(鉄鍬)

単位: mm []現状値, ()推定値

挿図 番号	遺構	遺物 番号	現存長	刃部長	刃部幅	厚さ	棒状部 長	棒状部 幅	棒状部 厚	突起 部幅	突起 部厚	茎長	茎幅	茎厚	現存 重量	実測 番号	備考
14図-7	横穴1	001-7	[56.5]	27.0	9.5	1.2	[29.5]	6.0	3.0						5.87	6	
8	横穴1	001-6	[63.0]	25.5	9.5	1.5	[37.5]	5.5	2.8						7.20	5	
9	横穴1	001-9	[35.0]	21.5	9.0		[13.5]	5.5	2.3						3.83	8	
10	横穴1	023	59.0	(16.0)	9.0		(43.0)	6.5	4.0						10.11	23	
11	横穴1	027	[53.0]	[31.5]	7.5	2.0	[21.5]	5.0	3.0						4.71	26	
12	横穴1	040	(52.0)	(26.0)	7.0		[26.5]	5.5	3.0						6.90	31	
13	横穴1	001-8	[37.5]	24.5	9.0		[13.0]	7.5	2.3						3.60	7	
14	横穴1	012	54.0	[16.5]	10.0	1.5	[37.5]	7.3	4.8						12.48	20	
15	横穴1	001-12	[28.0]	[28.0]	12.0	2.0									3.09	10	
16	横穴1	001-10	[30.0]	16.0	[10.0]		[14.0]	5.5	2.5						3.28	9	
17	横穴1	006-a	98.0	18.0	10.0		[73.0]	5.8				7.0	5.0	4.5	58.44	17	木質残存
17	横穴1	006-b	82.0				[59.0]	4.8				23.0	3.5 1.2	2.8		17	木質残存
17	横穴1	006-c	45.0				[45.0]	5.0								17	木質残存
17	横穴1	006-d	59.0				[50.0]	5.5				9.0	4.0	3.5		17	木質残存
17	横穴1	006-e	53.5				[53.5]	4.5	3.5							17	
18	横穴1	001-4	[52.5]				[52.5]	0.6 0.3	3.0						11.68	4	
19	横穴1	032	[55.0]				[55.0]	5.5 6.5	3.0						6.55	28	
20	横穴1	041	[56.0]				[56.0]	4.5	3.2						8.84	32	
21	横穴1	001-2a	[42.0]				[42.0]	6.5	2.0						4.83	2	
21	横穴1	001-2b	[19.0]				[19.0]	5.0	2.0							2	
22	横穴1	001-13	[47.0]				[47.0]	6.5 5.0	3.1						4.49	11	
23	横穴1	009	[38.5]				[38.5]	12.5 6.5	4.8						5.93	19	棒状部か?
24	横穴1	024a	[57.0]				[57.0]	6.5							11.00	24	木質残存
24	横穴1	024b	(29.0)				(29.0)	(6.0)								24	
25	横穴1	001-20	[50.5]				(38.0)	7.0				[15.0]	4.0	3.5	8.85	14	
26	横穴1	001-14	[45.5]				[36.0]	6.0	3.5	(11.0)	[2.5]				4.64	12	
27	横穴1	033a	[30.5]				[8.5]	3.0				(13.0)			5.08	29	
27	横穴1	033b	[9.5]				[9.5]		2.5							29	
28	横穴1	001-19	[31.0]				[17.5]			[10.0]	[3.5]	[13.5]			2.28	13	木質残存
29	横穴1	022	[34.0]									[34.0]	4.0	3.0	3.02	22	木質残存
30	横穴1	037	[23.5]									[23.5]		2.0	1.30	30	木質残存
31	横穴1	001-21	[39.5]									[39.5]	5.5 2.0	3.0	1.57	15	木質残存
32	横穴1	007	[27.0]									[27.0]	3.5 1.5	2.1	0.56	18	木質残存
	横穴1	001-5		(以下、錆により部位等不明なため重量のみ計測)										3.66			
	横穴1	001-11													3.65		
	横穴1	001-15													3.56		
	横穴1	001-16													2.49		
	横穴1	001-17													4.92		
	横穴1	001-18													5.18		
	横穴1	005													4.46		
	横穴1	010													2.76		
	横穴1	014													1.70		
	横穴1	015													0.97		
	横穴1	021													7.05		
	横穴1	025													4.87		
	横穴1	028													3.89		
	横穴1	038													4.77		
	横穴1	039													7.34		

横穴4 (第16図, 第1・2表, 図版17)

調査区域の中では最も西に位置する。踏査時には完全に埋まっており、遺構確認のため重機で斜面を削平した際に発見された。開口部周辺の半円弧を描く連続模様はその際の削平痕である(写真図版17)。南西斜面で西南西に向かって開口しており、主軸は等高線と直交する。溝に区画された左棺座があるが、副葬品などの遺物は出土していない。

土層堆積 玄門は埋まった状態であり、玄室には天井崩落土や表土が流れ込んでいた。それらの堆積物の土層堆積状態を確認しながら取り除いたところ、玄室の床面には鉄分を多く含んで固く締まった暗灰褐色土が一面を覆っていた。この土の玄室での層厚は3cm～4cmであるが、羨道部分では底面の傾斜を補うかのように羨道手前で60cmと厚い。横穴4の構築後、羨道奥の玄門部付近で山砂を含んだ灰褐色土が20cmの局所的に堆積したのを皮切りに、土砂の流れ込みと天井崩落土が自然堆積し、羨道奥をピークとした120cmの小山状に積もったものであろう。奥壁での堆積土は薄い。

玄室 玄室の平面形は最大幅2.3m・奥行2.39mで、隅丸のほぼ正方形である。側壁・奥壁からの立ち上がりは明瞭で、側壁はほぼ垂直に、奥壁は一旦奥へとふくらみをみせ、0.3mほどの高さでわずかに内側へと傾斜する。玄室の天井形はアーチ型である。玄門部で高く奥壁に向かって低くなる。奥壁と両側壁上方には工具痕が筋状に認められる。

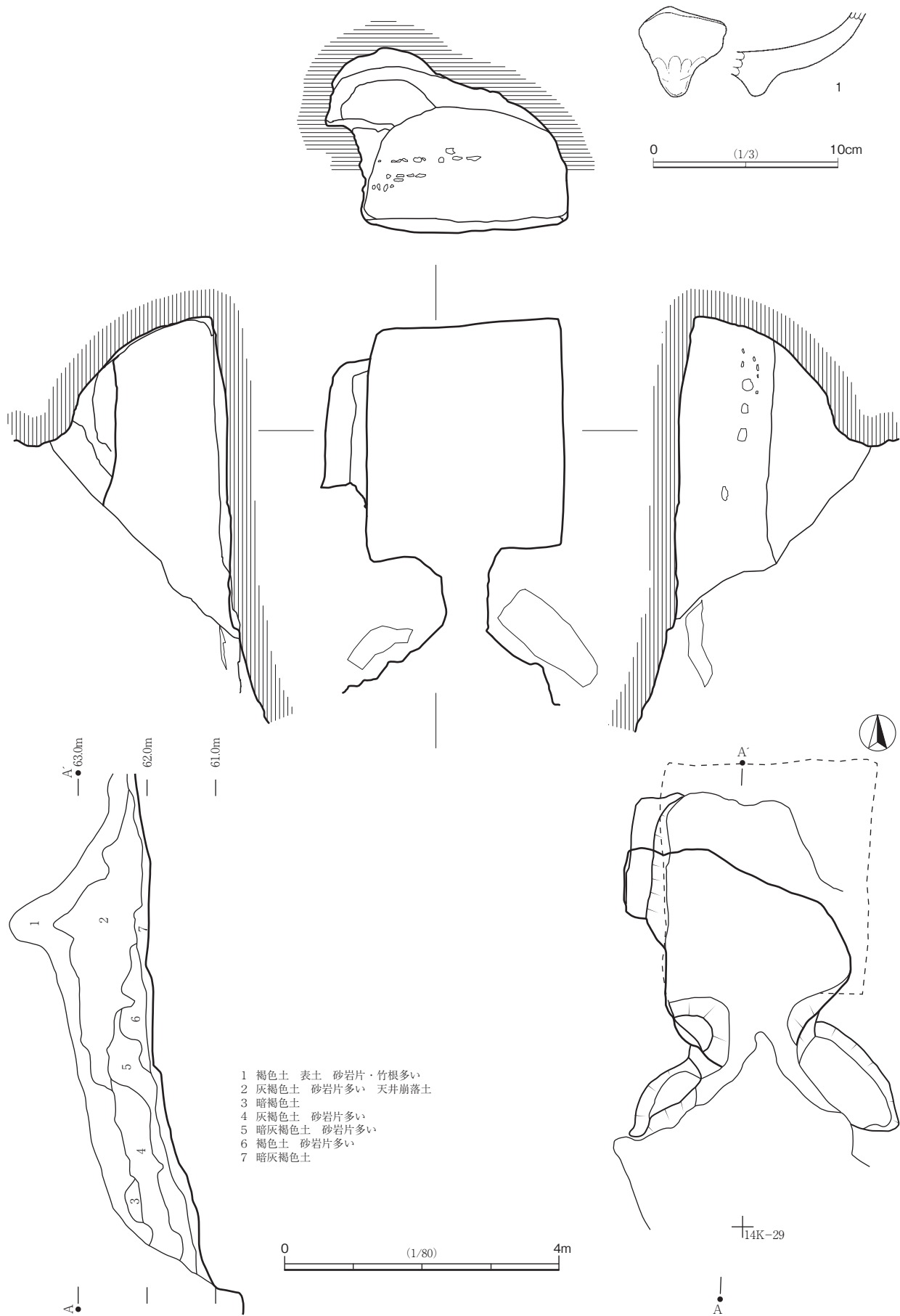
奥壁に向かって左側には、底面から30cmの高まりをもった棺座があり、棺座の周囲を排水溝が廻る。棺床部は縦1.80m・横0.45m・深さ0.2mほどであり、棺床面は平坦である。

羨道 羨道は右袖側に偏っている。幅は約0.9mであるが、0.55mと狭まっている部位がある。羨道の始まりをこの狭まった部分と仮定すると、推定される羨道の長さは3.2mを測る。玄室へと通じる緩やかな登り坂となっているが、玄室の手前1.5mで13cmほどの段差がある。羨道と玄室を隔てる隔壁はない。

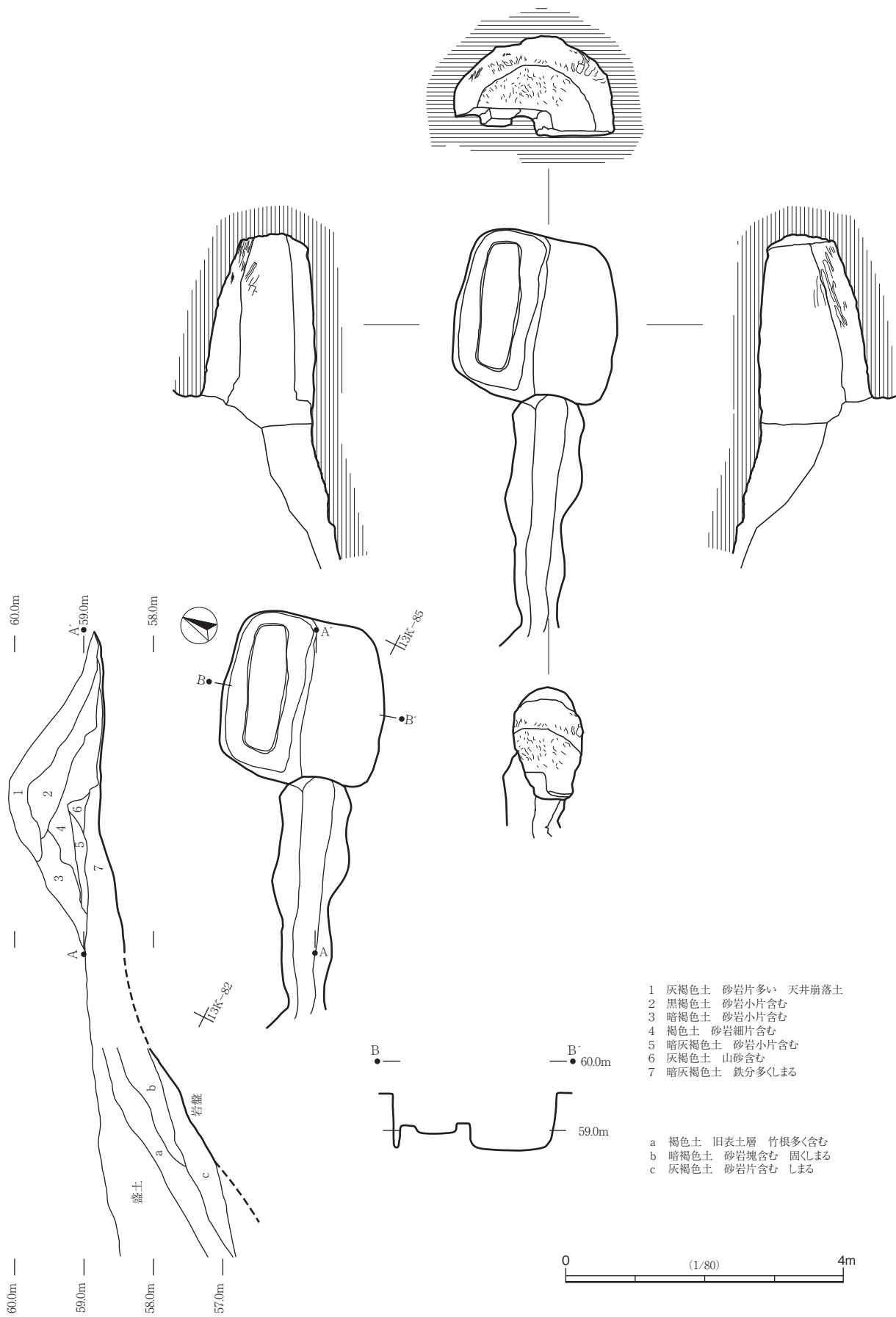
羨道と玄室の境が平坦な底面で、左側に棺座を配する横穴は富津市西山2号・10号、富津市大満Ⅲ-19号、富津市神宿5号がある⁵⁾。

前庭部 羨道と前庭部の境は、羨道の軸に対して45度を開いた床面の形状から推定される。全体の形状は不明であるが、前庭部の存在はわずかながら確認できた。

遺物 横穴4では遺物の出土はなかった。



第15図 横穴3



第16図 横穴4

横穴5(第17図, 第1・2表, 図版17)

横穴5は崩落土を主体とする砂岩質の土砂で完全に埋没した状態で発見され、遺構検出に多大な労力を要した。横穴4の調査時に一部表土が滑り落ち、存在が確認された。年度を改めて行った調査ではまず、崖斜面の土砂を除去して安全性を確保したうえで、玄室・羨道に溜まっていた天井崩落土と斜面から流れ込んだ土など大量の土砂を排出することから調査を始めた。

南西斜面で南南西に向かって開口し、横穴6と隣接する。玄室は大和田遺跡群の中で最も大きく、奥棺座を有する。遺物は覆土中から石が2点出土しているが、上方から流れ込んだ可能性が高く、この遺構に伴う遺物ではないと判断した。1点は流紋岩の礫、もう1点はチャートの礫片である。

土層堆積 玄室床面直上に薄く山砂が堆積する。羨道部は黒褐色の腐植土が4cmほど堆積しており羨道入口でわずかに厚みを増すが前庭部では層厚を減ずる。羨道部の入り口付近ではしまりのない黒褐色土が部分的に堆積しており、中に土師器片が混じる。この後、玄室、羨道、前庭部には砂岩片を含んだ遺構の崩落土が堆積していくが、玄門部の崩落によって流れ込んだ灰褐色土が、奥棺座の掘り込み部に充満する。

玄室 横穴5の玄室の大きさは、幅3.90m・長さ4.73m・現存高2.50mで、大和田遺跡の中では最大規模である。脆い砂岩質の崩落土と土砂などの堆積物によって羨道や玄室がほぼ埋まっていたが、これらを搬出したところ、玄室の奥に高棺座が設置された大型の横穴の形態が明らかとなった。左右袖部はどちらも角部が強く造りだされる。床面からの立ち上がりはほぼ垂直で、右側壁は1.5m付近に天井部への変換点がある。

玄室部の天井は崩落していたため形状は不明であるが、棺座の天井部は角部が丸いアーチ型である。棺床の幅は0.4m・長さは1.6mである。玄室奥から棺座奥壁までの距離は0.85m、玄室と棺座の比高は1.1mである。

排水溝は確認できなかった。床面は前庭部に向かって緩やかに下降する。

羨道 羨道は奥幅1.94m・中幅1.20m・長さ4.50mである。羨門は羨道幅の1/2程で0.4mと狭い。玄門までの勾配は緩やかで、隔壁はなく、玄室へと導かれる。

玄室から羨道に段を作らないフラットな底面形状をし、玄室の奥に棺座を設ける例は、富津市西山19号・26号、富津市西山26号、市原市岩1号があるが、大和田遺跡群(7)横穴5のように奥壁のさらに奥に棺台を一段高く据え、棺床を窪めるタイプのものは市原市では類例がない⁶⁾。

前庭部 羨門から前庭部へは0.4mの幅のまま0.8m続くが、その先の調査は実施できなかった。

遺物 覆土中から土師器甕小片(図版19)、礫1点、礫片1点の計2点出土した。礫は上方からの流れ込みと思われる。

横穴6(第17図, 第1・2表, 図版15・17・18・20)

横穴5と同様、平成22年度に行われた横穴4の調査の際に発見された。羨道に薄く黒褐色土が堆積した後、玄門部分で崩落が始まり、徐々に埋没していったものと思われる。調査当初、横穴は完全に土砂に埋没していた。軟弱な岩盤に大きな空間(横穴)が穿たれたことによる天井部の崩落に始まり、斜面からは長期にわたる土砂流入があったと推測される。このため発見が遅れ、検出困難な状況下にあった。横穴5の

堆積土は灰白色の砂岩を多く含んでいたが、横穴6では褐色～黒褐色土が主体であった。横穴5に比べると、玄室底面の高さは15cmほど高く、横穴5の西壁の一部を切っている。羨道部の玄門近くでは、底部の丸い土師器の小型壺1点が出土している。

なお、横穴5と横穴6の切り合い関係は、デジタル点群データに平面プランを加えた画像を添付した(写真図版15(3))。

土層堆積 羨道で柔らかな黒褐色土が底面と水平に25cmほど堆積したあと、玄門部下の床面には砂岩片を含んだ灰褐色土が40cmをピークとするなだらかな丘のように積もる。同様に丘陵の岩体を構成する砂岩小・細片が繰り返し堆積し続けた後、褐色の土砂が流入したようである。

玄室 玄室規模は、幅3.5m・長さ3.3m・高さ1.6mである。左袖部は張り出すが、右は羨道部からわずかに膨らむのみで、明瞭な袖を形成しない。これは横穴5の存在を意識した造営と思われ、既存の横穴を破壊せぬよう配慮した結果の可能性が考えられる。互いの羨門中心からの距離は5.6mだが、掘り進めるうちに玄室で接し、横穴5の左壁面奥側を穿っている。側壁は床面から膨らみをもって立ち上がり、奥壁はやや内側に向かう。天井の形状は、遺存する側壁・奥壁の立ち上がり、奥壁の半円形状から推定するとアーチ型であった可能性が高い。

羨道 長さは左右で異なり、左は2.6m、右は2.9mを測る。幅は羨門部で1.18m、羨道奥では2.2mである。

前庭部 羨門前は南西方向に150度前後開けているようだが、前庭部の全容は不明である。

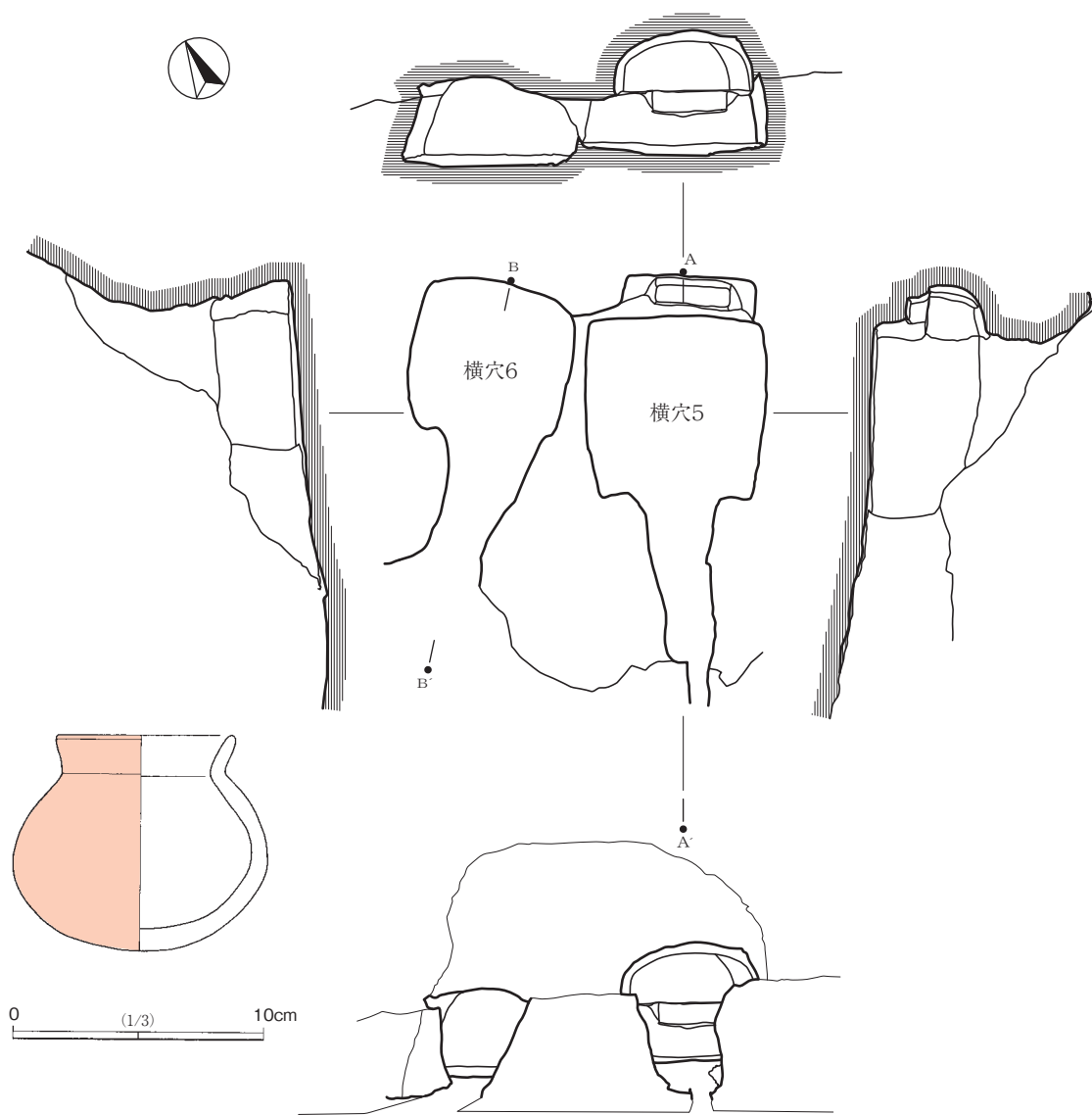
遺物 羨道部の玄室寄り、床面直上から小型の土師器壺が正位置にて出土した。口径6.9cm、器高8.7cm、両手のひらでくるめるほど小型で丸底だが、重心が下方にあるため、支えを必要とするほどの不安定感はない。胎土に砂粒を多く含む。内面の色調は橙色で、標準土色による色表示は内面が橙7.5YR 6/6、外面は橙5YR 6/6である⁷⁾。体部から口縁部にかけて赤彩がみられる。焼成は良好だが、器面が磨滅しているため、調整は不明である。5世紀末の年代が推定され、西上総地域における横穴構築の初現期である6世紀後半⁸⁾より1世紀ほども遡る。祭祀用の品であったため、日常器より古い様相を示す、或いは長期に保管使用されたものであった可能性も考えられる。

2 やぐら状遺構 (第18・19図, 図版18)

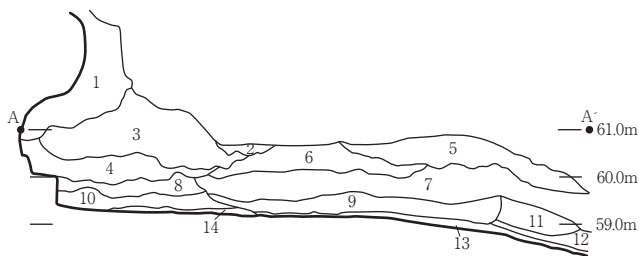
調査範囲のほぼ中央、標高60m付近では中・近世のやぐら状遺構1基が検出された。真南に開口しており、奥壁と左壁面には浅い凹みが多くみられるが、人為的な掘り込みか否かは判断できない。奥壁の東側は濃い褐色に変色しており、湧水の滲出がみられる。開口部左側の袖部を後世の炭窯が切っている。奥壁と左側壁には中段位がしつらえてあり、奥壁の中央部には台座のような平坦面がみられる。いわゆる三方段と認識される。

平面形は矩形を呈しており、奥壁の幅3.0m、最大幅6.7m、平坦部の奥行2.0mである。玄室と前庭部の境は認識できなかった。

やぐら状遺構の床面中央部には南北2.0m東西3.0mの範囲に5基の四角い掘り込みがあり、奥面の一点から南東方向に3基、南西方向に2基が並ぶ。5基の上端は30cm～40cm、下端は10cm～20cmとともに方形～長方形を示す。それぞれの深さは12cm～30cmであり、床面の傾きに伴って高低差が開く。これらを



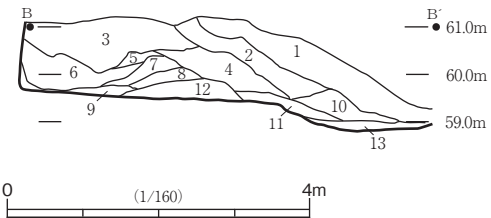
横穴5



横穴5

- 1 暗灰褐色土 砂岩片含む しまりなし
- 2 明灰褐色土 崩落した砂岩片
- 3 灰褐色土 砂岩片多い 崩落土
- 4 暗灰褐色土 砂岩片含む しまりなし
- 5 暗灰褐色土 砂岩片含む
- 6 灰褐色土 砂岩片多い 崩落土
- 7 灰褐色土 砂岩片含む しまりなし
- 8 灰褐色土 砂岩片多い 崩落土
- 9 灰褐色土 砂岩主体
- 10 暗灰褐色土 砂岩片含む しまりなし
- 11 黒褐色土 しまりなし 土器出土
- 12 暗褐色土 しまりなし
- 13 黒褐色土 横穴床面上の腐植土
- 14 暗灰褐色土 山砂主体 しまりなし

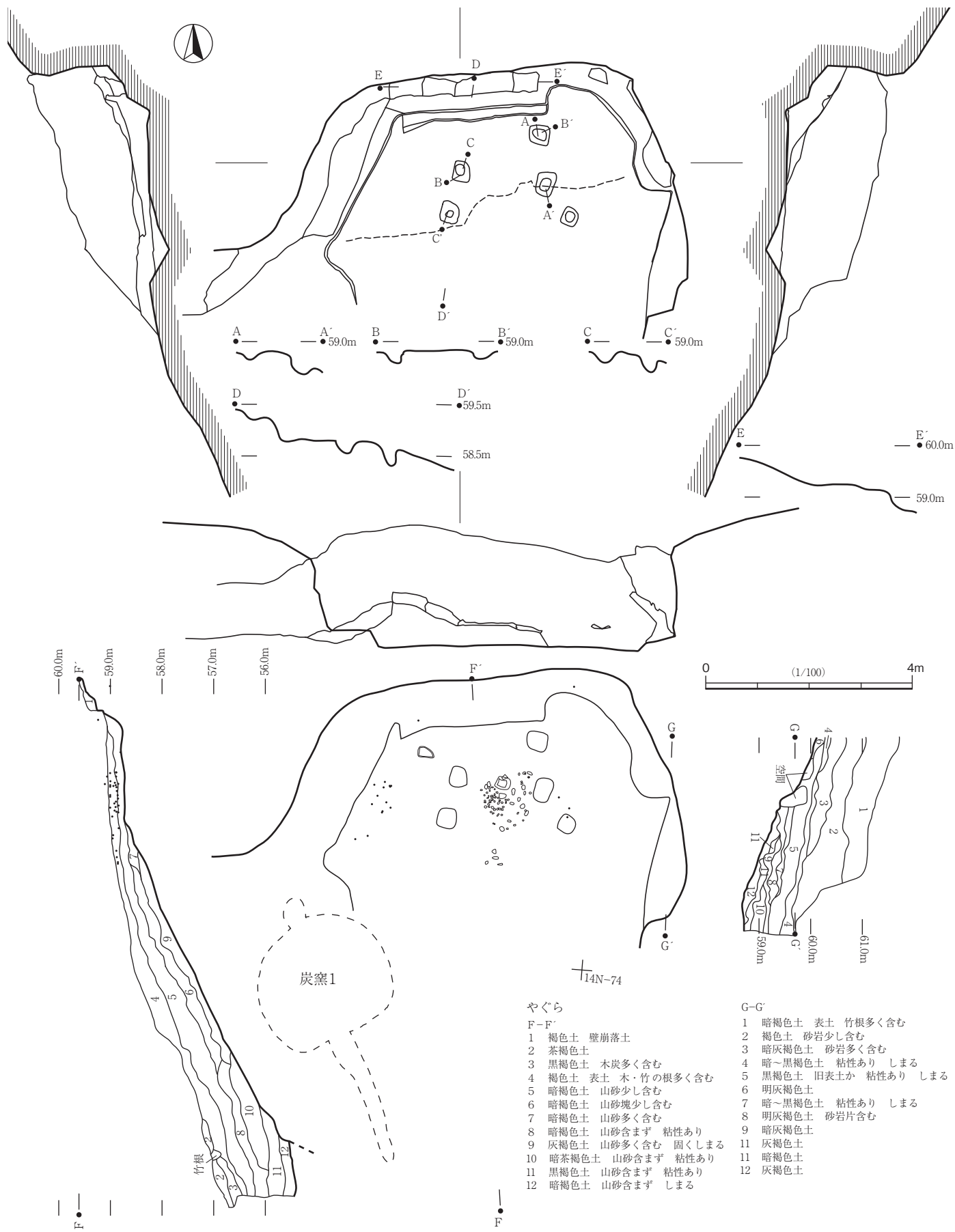
横穴6



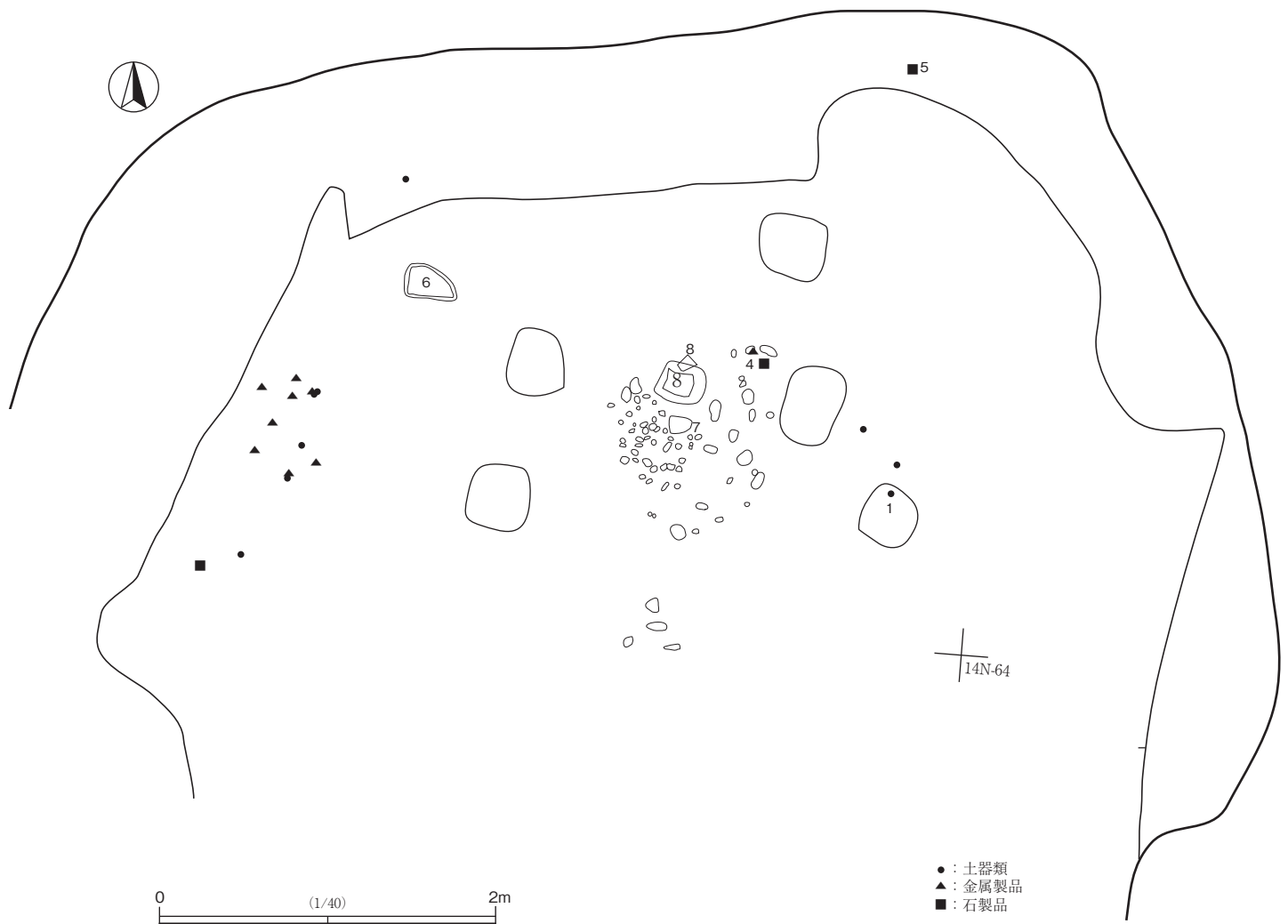
横穴6

- 1 灰褐色土 ややしまる
- 2 暗灰褐色土 砂岩細片含む
- 3 灰褐色土 砂岩大塊・山砂多く含む
- 4 暗灰褐色土 砂岩小片含む
- 5 褐色土
- 6 暗灰褐色土 砂岩・山砂多く含む
- 7 暗褐色土 砂岩塊少し含む
- 8 灰褐色土 砂岩細片含む
- 9 黒褐色土 砂岩・山砂含まず
- 10 黒褐色土
- 11 暗褐色土 砂岩片少し含む
- 12 灰褐色土 砂岩片少し含む
- 13 黒褐色土 しまりなし

第17図 横穴5・6



第18図 やぐら状遺構



第19図 やぐら出土遺物分布図

第5表 金属製品計測表3(銅銭貨)

挿図 番号	遺 構	遺物 番号	銭貨名	初鑄年		推定鑄所	特徴等	計測値(単位:mm)						重量 (g)	備 考
				和暦	西暦			縁外 径	縁内 径	郭外 径	郭内 径	縁厚	肌厚		
20図-2	やぐら	001	寛永通寶	元文 4	1739	江戸深川 平野新田	小型。 虎の尾寛	23.20	19.00	7.80	6.60	1.00	0.70	240	一括取 り上げ
3	やぐら	002	寛永通寶	明和 6	1769	江戸深川 千田新田	11波	28.40	21.50	7.40	6.20	1.30	1.00	4.91	位置記 録済

第6表 金属製品計測表4(鉄釘)

単位:mm・g

挿図 番号	遺構	遺物 番号	分類	現存長	頭部 奥行	頭部 幅	頭部 厚	棒状部 長	棒状部 幅	棒状部厚	現存 重量	実測 番号	備考
20図-4	やぐら	021	平折釘か	[56.5]	-	7.0	-	56.5	2.0~5.0	2.0~7.0	4.0	33	木質残存。 江戸時代か

柱穴とし、また原位置から動いたとみられる礎石で補完した小規模な建物の存在が推察される。

三方を壁で囲まれた大和田遺跡群(7)のやぐら状遺構の全体的な形状を例えるならば、掃出しが平坦で奥面が高いチリトリのような構造である。底面と奥壁・左壁の間には溝と中段が形成されている部分がある。床面は奥壁近くでは平坦なテラス状で、開口部にかけて下降し、丘陵の斜面と同化する。

遺物(第20図, 第5・6表, 図版19～21・23) 遺物は大きく分けて2か所に分布する。奥壁に向かって左側には鉄釘等の金属製品類, 中心部は石製品・礫である。

1は瀬戸美濃染付端反碗で外面に山水画が描かれる, 19世紀前半(江戸時代末期)のものと思われる。2・3は寛永通寶で, 初鑄年は18世紀前半と後半である。4は鉄釘で折れ釘, 5は灰白色～明褐色砂岩製砥石でいずれも中世～近世と推測される。6～8は調査時に五輪塔等の中世石塔類の可能性も考えられたが, 傾斜等の形状から石塔は復元できず, 柱の当たる箇所が特定できたことにより, 石塔類再利用ではない礎石として判断した。6は礫岩, 7・8は明灰褐色砂岩である。

石製品・礫を囲む穴は屋根を支えるための柱穴と推定され, 内側に何らかの信仰の対象物が存在したものであると思われる。礫99点は子供の拳大ほどの大きさで加工痕はない。大部分は凹み=加工痕のある大きな砂岩の前に分布する。礫99点の石材内訳は流紋岩29点(2,784g)・砂岩32点(2,776g)・チャート24点(2,495g)・安山岩9点(788g)・ホルンフェルス3点(324g)・蛇紋岩2点(114g)である。大和田の周辺に分布する万田野礫層に産出する石材構成と一致する。参考のため写真のみ掲載した(図版23)。

3 炭窯

調査区の丘陵南側斜面に3基確認した。東側の炭窯3は, 当初横穴として調査が行われたが, 後に炭窯と改められた。南西に向けて開口している。この炭窯3から西へ30mの位置に炭窯1, さらに40m先に炭窯2が検出された。炭窯1と炭窯2の距離は約70mである。これら炭窯は多くの調査事例から近世以降の所産であるとされるが, 平面の形状や構築された場所などに横穴との共通性が認められるため, 横穴の改変や再利用の時期を検討する意味でも概要を記すこととする。

炭窯1(第21図, 図版18・23)

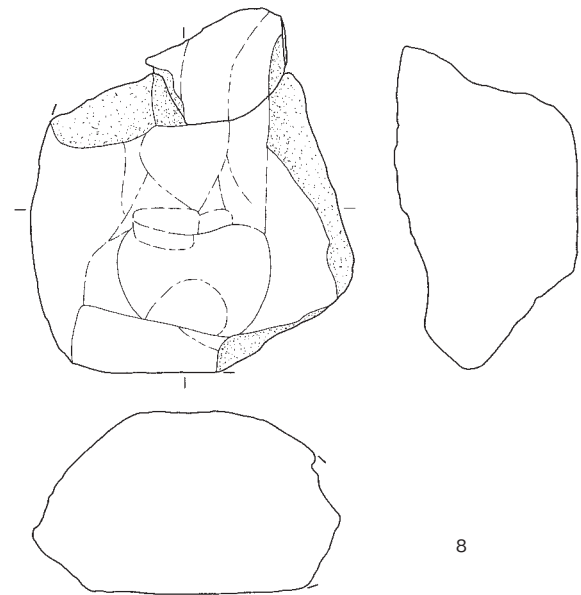
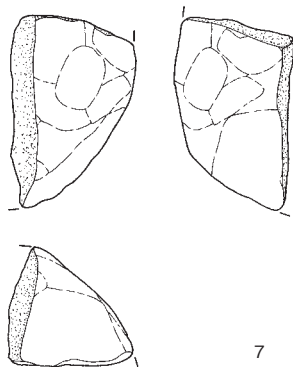
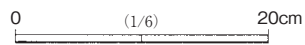
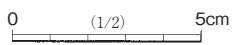
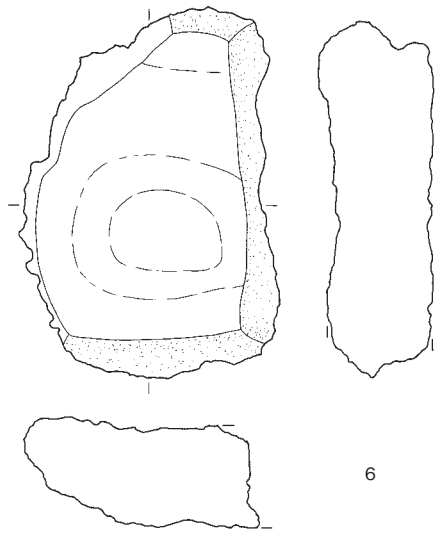
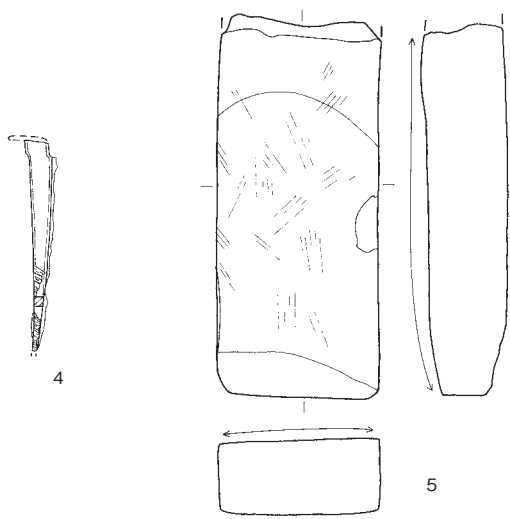
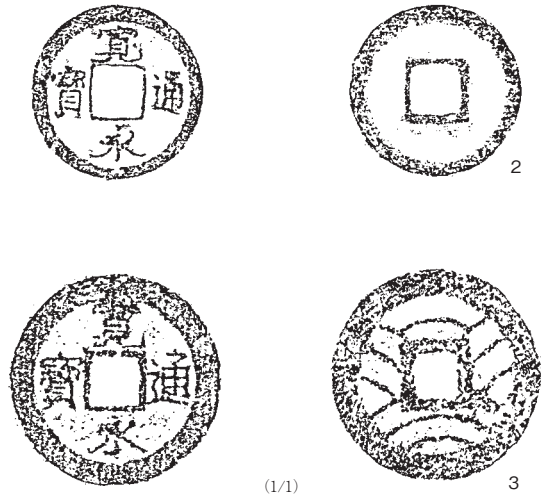
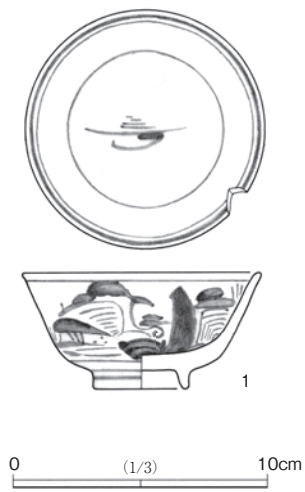
南側斜面に位置し, 南東方向に開口する。底面の標高は56.7mで, 北東に接するやぐらの前庭部を切っている。焚口は狭く, 窯内部の底面は2.0m×2.2mの円形である。窯底部には煙出しの穴から焚口まで5.4mの溝が確認され, 山砂や木炭, 炭化物を含んだ暗灰褐色土が10cm～15cm, 底面と水平に堆積していた。この後, 木炭・炭粒を多く含んだ褐色土もまた水平に堆積する。4層からは天井部や壁が崩落した土が混じるようになり, 表土の流れ込んだ後は崩落土が主体となる。

炭窯1に伴う遺物は, 土師器杯片・近世磁器片・鉄製板片が出土している。鉄製板片については, 不明製品であるため, 写真のみ掲載した(図版23)。

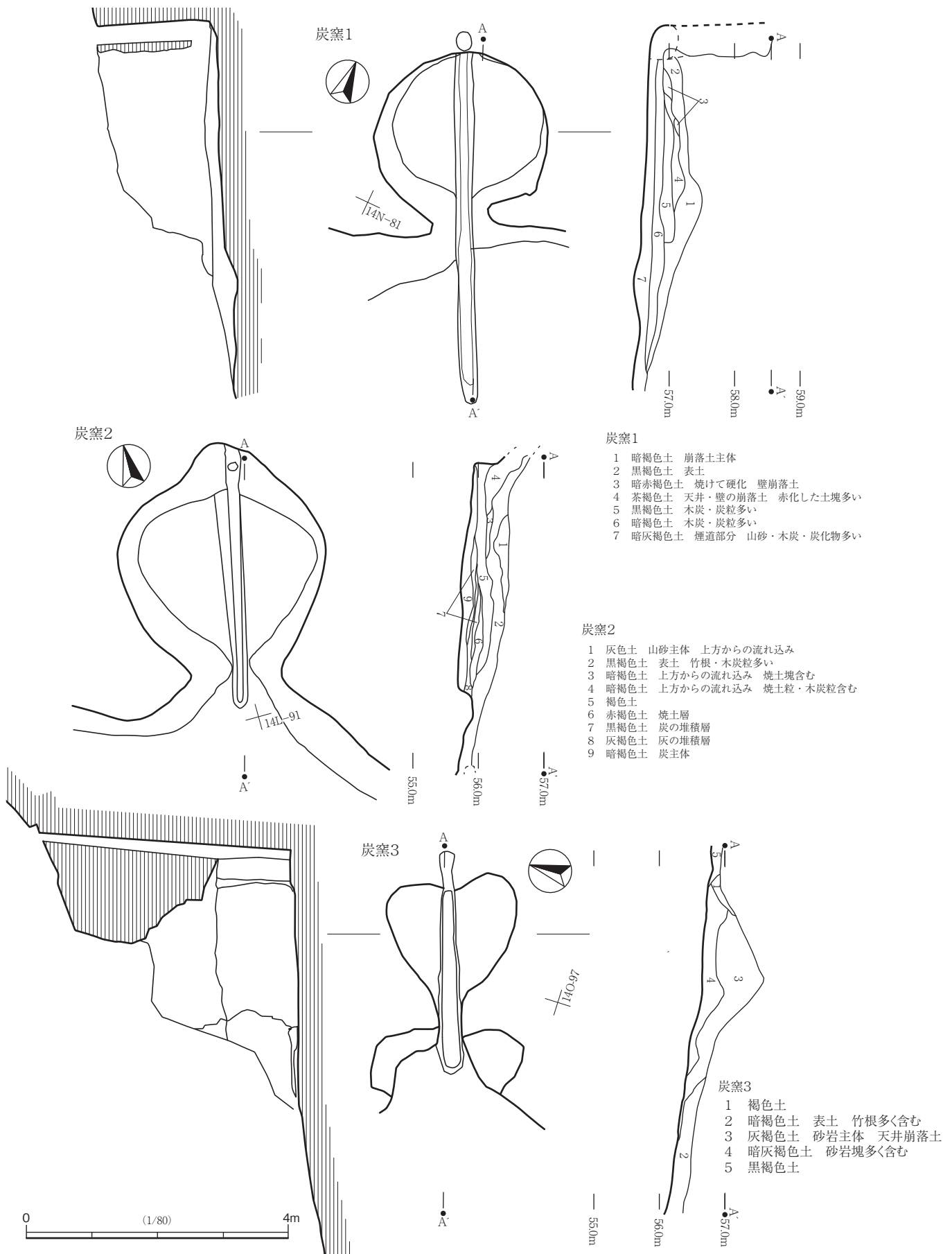
炭窯2(第21図, 図版18)

南側斜面に位置し, 西寄りの南方向に向かって開口する。大和田遺跡(7)の中では標高が最も低い標高55.8m付近に窯の底面がある。焚口は狭いが窯内部は2.6m×2.8mの横に広い楕円形である。煙道の長さは約3.8mである。

炭窯2には須恵器片が出土したが, 小片で復元には至らず, 図示は行わない。



第20図 やぐら状遺構出土遺物



第21図 炭窯1・2・3

炭窯3(第21図, 図版18)

南側斜面に位置し, 西南西方向に開口する。底面の標高は61.7mである。炭窯3基の中では最も東にあり, 斜面の等高線とは直交せず, やや西側に向けて開口している。底面は縦1.9m, 横2.1mで窯の奥壁部分が最も幅が広い。窯の焚口は狭く, 奥に広がりをもつ軍配(ハート)型である。底面下の空気を通す穴の長さは3.4mであり, 底面から地表へ向かう煙出しまでは3.8mである。焚口の前面は広く平坦である。

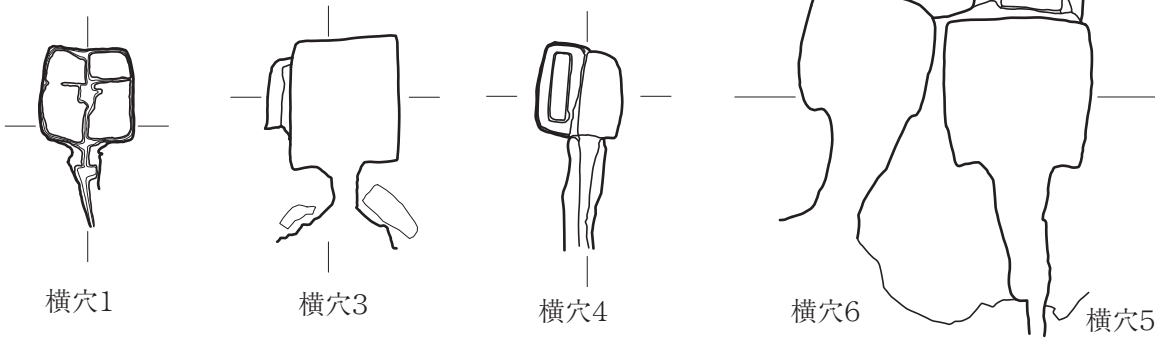
注

- 1 黒沢 崇 2013『東金市玉崎神社裏横穴群－土砂災害防止委託埋蔵文化財調査報告書－』(公財)千葉県教育振興財団, 黒沢 崇 2014『東金市玉崎神社裏横穴群(2)－東金市田間2地区土砂災害防止事業埋蔵文化財発掘調査報告書－』千葉県教育委員会
- 2 松本昌久・上野恵司ほか 1991「千葉県の横穴墓群」『シンポジウム関東横穴墓遺跡検討会資料』茨城考古学協会
西原崇浩 2008「千葉県横穴墓の受容と展開」『多知波奈の考古学』多知波奈考古学会, 雨宮龍太郎 2011「房総半島中央部の横穴墓制」『研究連絡誌』72号(財)千葉県教育振興財団 など。
- 3 橘考古学会 1997「特集 東国の鉄鏃」『多知波奈考古』第2号
- 4～6 注2と同様。
- 7 小山正忠・竹原秀雄 2000 新版 標準土色帖 日本色研事業株式会社
- 8 西原崇浩 1991「上総地方の横穴墓の様相(上)」『立正考古』第30号, 松本昌久 1993「東上総における横穴墓について」『多知波奈考古』創刊号, 小沢 洋 2008『房総古墳文化の研究』六一書房, 西原崇浩 2010「千葉県の横穴墓と古墳」『第15回東北・関東前方後円墳研究会大会 シンポジウム横穴墓と古墳 発表要旨資料』等。

奥壁と天井形状



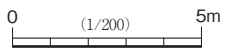
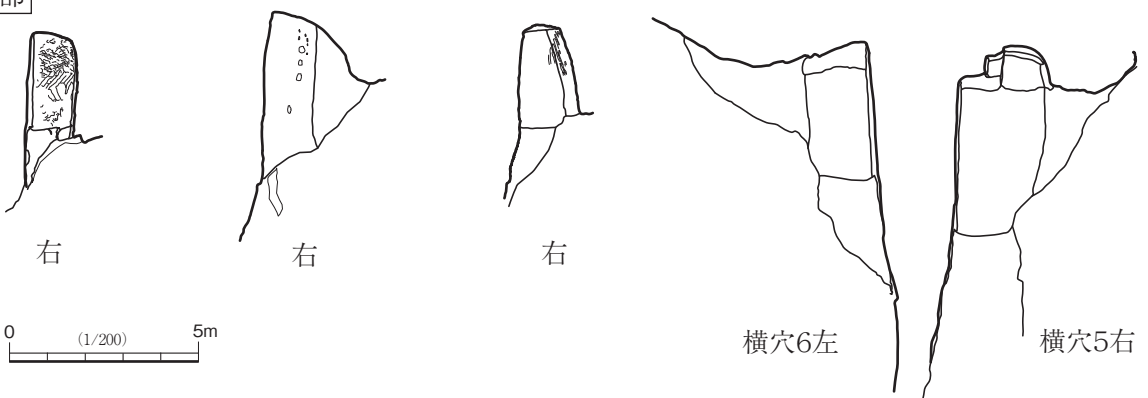
平面図



羨道～奥壁



側面部



第22図 横穴1・3～6形状

第4章 高滝陣屋跡

第1節 調査概要(第23図)

本遺跡範囲が事業範囲がかかる部分の内、中央部を除く東西地区1,670㎡について、平成23年6月14日～6月24日、上層確認調査を実施した。下層については、丘陵裾部の緩斜面地であるため、確認調査の必要はないと判断された。上層は幅2mのトレンチを7か所、長さ計63mで設定し、126㎡(約7.5%)で実施した結果、近世以前の遺構は検出されず、遺物は表土で見つかった近世陶磁器のみであった。残る事業範囲内にも上下層ともに遺構・遺物が存在する可能性が薄かったため、同地区の調査は終了した。

なお、座標・グリッドについては、周辺の大和田遺跡群と共有する形で設定した。

また、本報告では、調査時のトレンチ番号等を踏襲した。西部調査区に2本、東部調査区に幅2m・長さ5m～20mの確認調査トレンチを5本、ほぼ斜面に直交する様に設定した。近世段階の旧表土面は表土内と考えられたが、より古い遺構・遺物検出の可能性と土層把握のため、いずれも1m前後掘り下げた。しかし、トレンチ内からは、遺構・遺物ともに検出されなかった。

第2節 トレンチの状況(第24図, 図版24)

1 トレンチ

西部調査区の南西端部に、北西-南東方向で斜面にほぼ直交するように設定した、幅2m・長さ8mのトレンチである。地表面の標高は48.7m～50.2mで、北西端は深さ0.4m、南東端は深さ1.2m程まで掘り下げた。

土層は、北西端で地表下10cm、中央部で地表下60cmの黄褐色砂質土(Ⅳ層)が検出され、トレンチ内北西部でⅣ層の上に茶褐色土主体黄褐色土(Ⅲ層)が堆積し、トレンチ内中央部から南東にかけてⅢ層の上に黒褐色土(Ⅱ層)が載り、暗褐色土(表土Ⅰ層)が10cm～40cm堆積する。Ⅲ・Ⅳ層は流れ込みの土砂で、Ⅱ層は黒色土主体ながらしまりが強いことから、近世以降の盛土の可能性も考えられる。

2 トレンチ

西部調査区の東寄りに、ほぼ南北方向で斜面にほぼ直交するように設定した、幅2m・長さ20mのトレンチである。地表面の標高は48.4m～51.3mで、表土を地山まで1.2m～1.4m掘り下げ、北端部では1.9m掘り下げた。土層は、地表から1.2m～1.4m下で茶褐色粘土層(Ⅱ層)が検出され、黒褐色土層(表土Ⅰ層)が堆積する。Ⅰ・Ⅱ層の境界で鉄分塊があり水が湧き出したことから、Ⅱ層は近世段階では地山と考えられる。

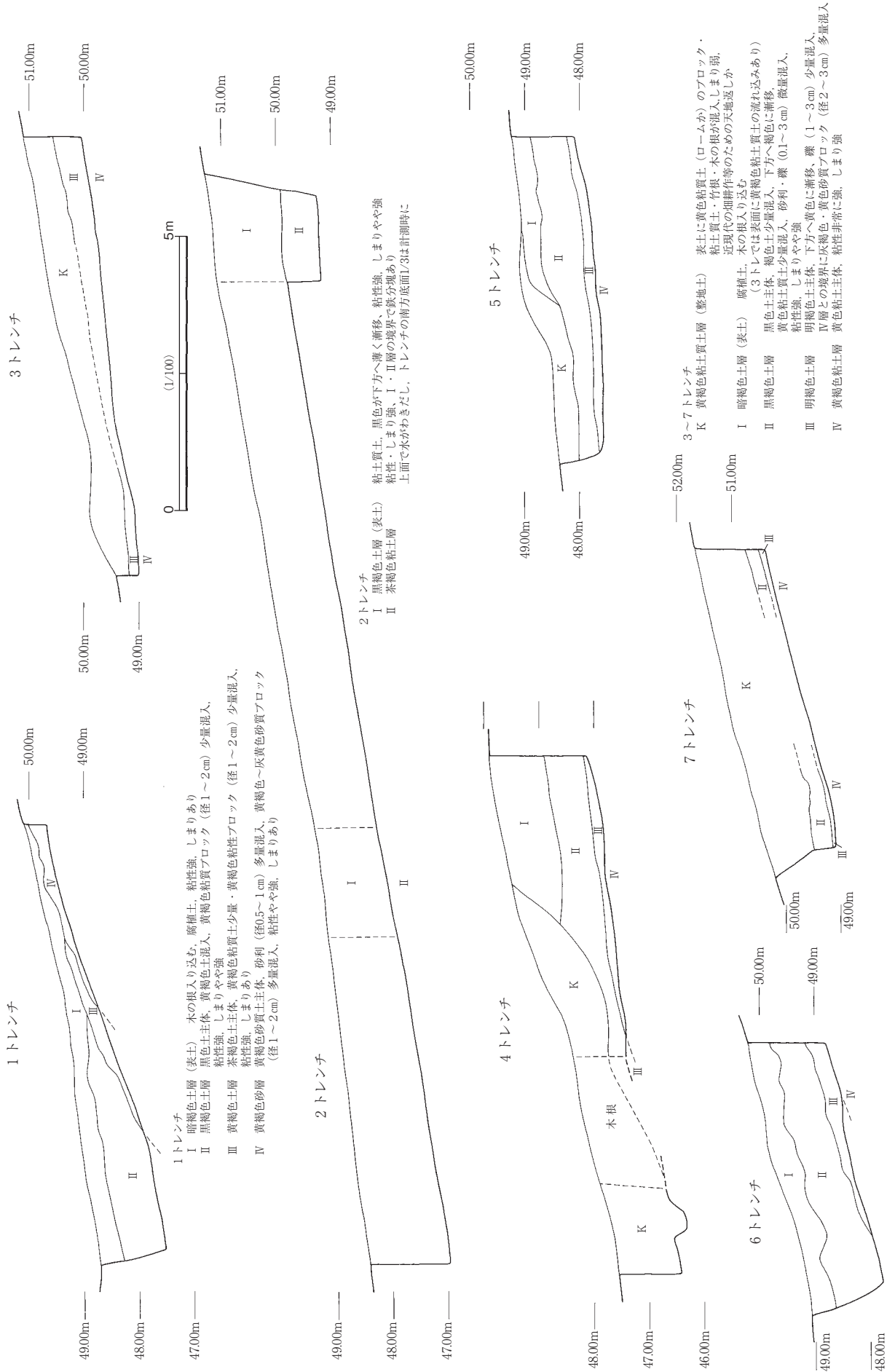
3 トレンチ

東部調査区の北西端部に、ほぼ南北方向で斜面にほぼ直交するように設定した、幅2m・長さ8mのトレンチである。地表面の標高は49.3m～51.2mで、地表から厚さ50cm前後で整地土層、以下10cm～50cmで明褐色土層(Ⅲ層)、黄褐色粘土層(Ⅳ層)上面まで、0.4m～1m程掘り下げた。

東部調査区の3トレンチから7トレンチの土層は同様である。Ⅰ：暗褐色土層、Ⅱ：黒褐色土層、Ⅲ：明褐色土層、Ⅳ：黄褐色粘土層で、Ⅰ層は表土、Ⅱ・Ⅲ層は黒色土や明褐色土主体でしまりがあり、砂・礫を斜面含む漸移層であることから、斜面のために土砂流れ込みによる長年の自然堆積土によるとみられ



第23图 高滝陣屋跡調査区全体図



第24図 トレンチ内土層断面図

る。Ⅳ層は混入物が少なく地山粘土層とみられる。また、植物根が混入するしまりの弱い黄褐色粘土質土（K層）が東部地区の段差以南地区で載り、その上の表土は確認できない程薄い。Ⅱ層以下はしまりがあり、近世の土層はⅠ層途中と考えられる。

4 トレンチ

東部調査区の西端部、3 トレンチの南側に、ほぼ南北方向で斜面にほぼ直交するように設定した、幅2 m・長さ10mのトレンチである。地表面の標高は47.5m～49.9mで、Ⅳ層上面まで1.1m～1.8m掘り下げた。Ⅰ層（表土）は1 m程と厚く、Ⅱ層は70cm前後、Ⅲ層は20cm程で、地表面の段差の下でⅠ（表土）・Ⅱ層を切る形で攪拌層が1 m前後の厚さで載る。これにより、K層は近代以降の開墾・畑耕作による攪拌の可能性が考えられる。第2次世界大戦前後の作物増産のための斜面地開墾の可能性が高いことが推測できる。

5 トレンチ

東部調査区の中央部に、ほぼ東西方向で斜面に斜めにかかるように設定した、幅2 m・長さ6 mのトレンチである。地表面の標高は48.3m～49.3mで、地表からⅣ層上面まで1.1m掘り下げた。表土（Ⅰ層）は厚さ30cm～40cmで、Ⅰ・Ⅱ層を切ってからその上に一部被るように攪拌層（K層）が載る。Ⅱ層は70cm前後、Ⅲ層は15cm程である。

6 トレンチ

東部調査区の東端部に、ほぼ南北方向で斜面にほぼ直交するように設定した、幅2 m・長さ5 mのトレンチである。地表面の標高は49.0m～50.2mで、地表からⅣ層上面前後まで1.4m前後掘り下げた。本地点は攪拌層がなく、表土（Ⅰ層）が50cm前後、Ⅱ層が70cm前後、Ⅲ層が30cm程である。

7 トレンチ

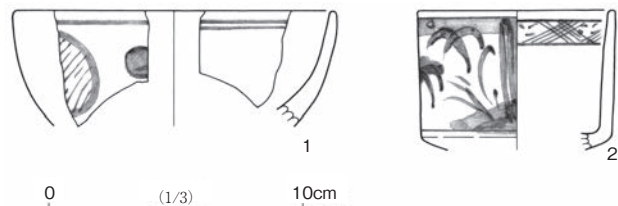
東部調査区の北西部、3 トレンチの東側にほぼ南北方向で斜面にほぼ直交するように設定した、幅2 m・長さ6 mのトレンチである。地表面の標高は50.2m～51.8mで、地表からⅣ層上面まで1.3m前後掘り下げた。厚さ1 m前後の攪拌土の下に厚さ20cm～30cmのⅡ層、厚さ10cm程のⅢ層があることから、攪拌はⅡ層も20cm～30cm削平していることが推測される。

第3節 遺物（第25図，図版24）

16Y-00付近の表土上層で出土した近世肥前磁器破片である。

1は染付厚手碗（くらわんか手）である。推定口径12.8cm，透明釉で明緑灰色（10GY8/1），文様は青灰色（5BG6/1）で，外面が口縁部に廻線，胴部に丸文散らし，内面は口縁部に二重廻線である。2は染付筒茶碗である。推定口径7.8cm，透明釉で灰白色（10Y7/1），文様は緑灰色（7.5GY6/1）～暗オリーブ灰色（5GY3/1）で，外面は口縁部と腰部に廻線，胴部に竹（笹）文，内面は口縁部に四方嚮文である。

いずれも18世紀後半の生産とみられる。



第25図 出土遺物

第5章 まとめ

大和田遺跡群(3)

直径約20m・高さ約1.8mの古墳時代円墳1基と直径約7m・高さ約1.1mの近世塚1基を検出した。古墳は、周溝が東西の丘陵上にもみ検出され、南北は急斜面部のため存在しなかった可能性がある。マウンド部の直径は約12mである。主体部の可能性のある遺構も検出されたが、遺物も人骨も出土せず、明確ではない。古墳も塚も遺構に伴う遺物は出土せず、詳細な時期等は不明であるが、円墳は古墳時代中～後期の緑岡古墳群に含まれるものと考えられる。

大和田遺跡群(7)

調査後は、南向きの急斜面地の発掘調査で、古墳時代横穴9基(内、中世やぐら1基、近世・近代炭窯3基に改変)が検出されたとされたが、整理作業の結果、古墳時代横穴5基、中・近世やぐら状遺構(祠設置岩窟)1基、近世～近代炭窯3基と判断した。

横穴に関しては、1基が単独で存在し4基が1地区に集中する。5基の形状は全て異なるが、横穴3～6はドーム型で棺座が造られていないか1基である東上総地域の初現期横穴の形態として、築造年代は6世紀後葉が推測され¹⁾。横穴1は天井はフラットで玄室の溝から2棺分を納める形が想定され、やや新しいが鉄鏃から6世紀葉～7世紀初頭に推測される。また、横穴6出土の横穴年代観より古い5世紀代の土師器小壺の解釈は注目され、過去に近接して調査された連続する横穴群²⁾や古墳群を含めた全体の中で、改めて再葬を含めた被葬者層や改造過程を考察する必要がある。よって、本報告書では敢えてそれらの検討は控えることとする。

「やぐら状遺構」に関しては、丘陵南面の中央付近に1基、単独で分布する。「やぐら」は、鎌倉時代～南北朝時代に丘陵の岩盤を矩形に削り貫いて造られた僧侶・武士層の納骨・供養施設で、鎌倉を中心に房総南部にも多く分布している。千葉県内の「やぐら」総数は、平成7年度までの調査では158群522基確認されているが、近世以降の祠や物置等と形態が類似しているため、判別困難な事例がある³⁾。山下に真言宗光厳寺が所在し、本堂には市原市指定文化財の鎌倉時代末期の仏像、両界大日如来坐像、不動明王坐像が鎮座している。光厳寺の位置にはかつて別の寺院の本覚寺があり、17世紀末に移転があったが、やぐらが信仰の対象であった時代に、本覚寺が後背に山を背負って南に展開する集落の要の寺であった可能性もあろう。

しかし、本遺構の形状は、本来の「やぐら」に多い矩形ではなく、手前に開いていること、納骨穴がないこと、遺物は、調査時に判断された中世石塔類が礎石だと判明し、他に中世遺物が検出されず、近世遺物はあること、中央に祠の可能性のある小型の建物が推定できること等から、近世の祠安置のための岩窟の可能性が高いと考えられる。ただし、歴史的環境や奥壁手前に段を有していることから、「やぐら」を改造した可能性も否定ができないであろう。

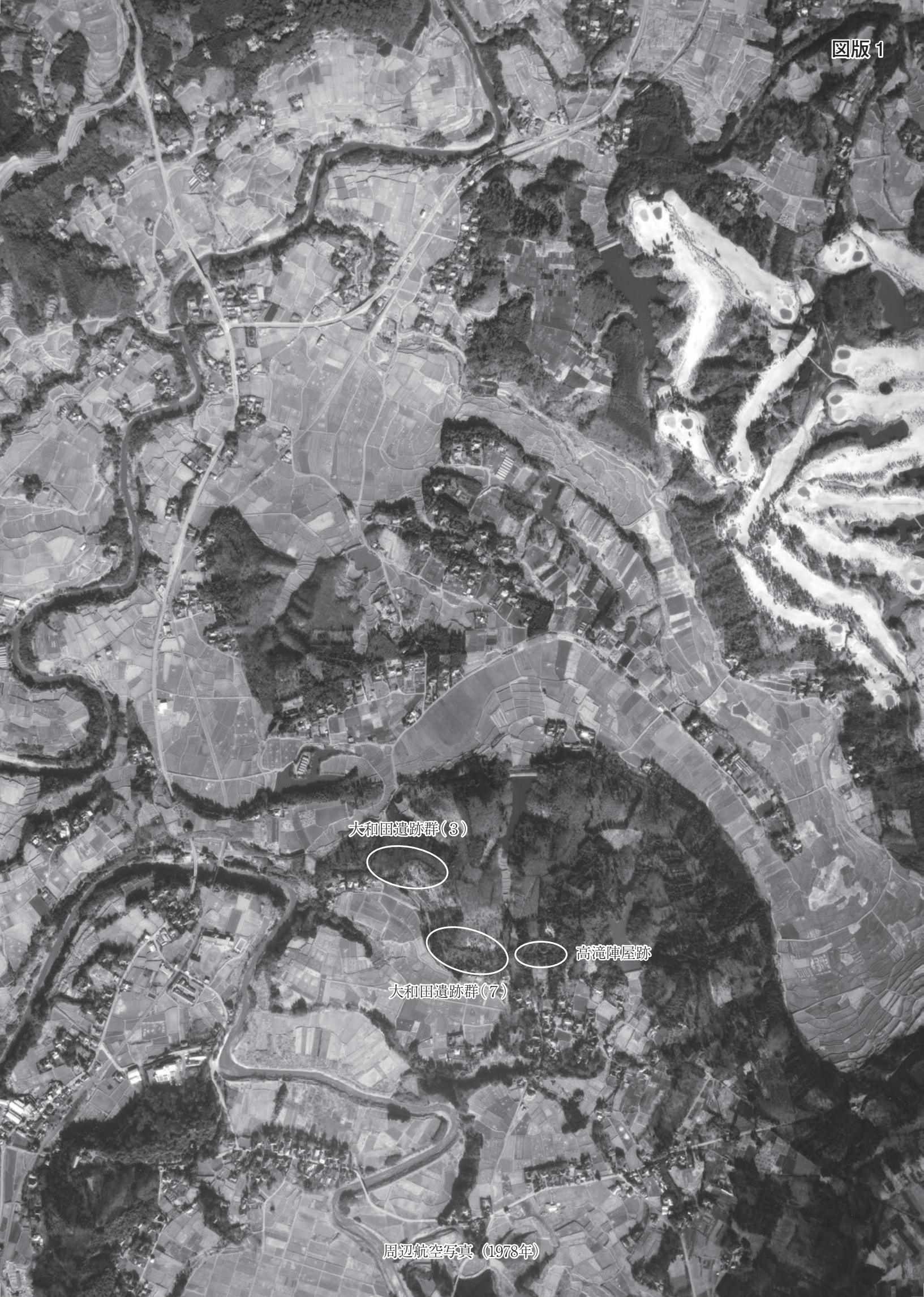
高滝陣屋跡

上層確認調査の結果、近世以前の遺構は検出されず、遺物は表土で見つかった近世陶磁器⁴⁾のみであった。残る事業範囲内にも上下層共に遺構・遺物が存在する可能性が薄かった。文献史料によると、陣屋自体は西方150mに位置する光厳寺を一時的に使用したとされ、家臣団も周辺民家を利用したと考えられることから、事業範囲にかかる緩傾斜地の調査区内では、新たな建物等は建てられなかったことが考えられる。

注

- 1 西原崇浩 2010「千葉県西上総における横穴墓の展開－特異構造を中心として－」『池上悟先生還暦記念論集』ほか
- 2 (財)市原市文化財センター 1988『大和田遺跡』、(公財)千葉県教育振興財団 2013『首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告21－市原市番後台遺跡・山口城跡・大和田遺跡群－』
- 3 (財)千葉県史料研究財団 1996『千葉県やぐら分布調査報告書』、その後井上は、近世を除けば400基程度と推定している(井上哲朗 1997「房総半島における「やぐら」－線刻・浮彫五輪塔を中心として－」『史館』29)
- 4 本報告書作成にあたり参考とした、近世遺物編年資料等は下記のとおりである。
陶磁器類：豊島区遺跡調査会 1998「陶磁器・土器 分類・計数基準」『伝中・上富士前Ⅱ』別冊
野上建紀 2000「(肥前)磁器の編年(色絵以外) 1. 碗・小杯・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
銭貨：小川浩編 1972『寛永通寶錢譜』日本古銭研究会

写 真 图 版



大和国遺跡群(3)



大和国遺跡群(7)



高滝陣屋跡



(1)調査区台地近景(南上空から)



(2)調査区西部SM-1・2(西上空から)



(1)SM-1及び西部(西上空から)



(2)SM-1全景(直上空から)



(1) 東部緩斜面部調査前(東から)



(2) 東部緩斜面部調査前(西から)



(3) 東部台地上調査前(東から)



(4) SM-1 伐採前(西から)



(5) SM-1 伐採前(北西から)



(6) SM-1・2 伐採後(西から)



(7) SM-1 伐採後(北西から)



(8) SM-1 清掃後(西から)



(1)SM-2 伐採前(北東から)



(2)SM-1・2 伐採後(東から)



(3)SM-2 伐採後(北東から)



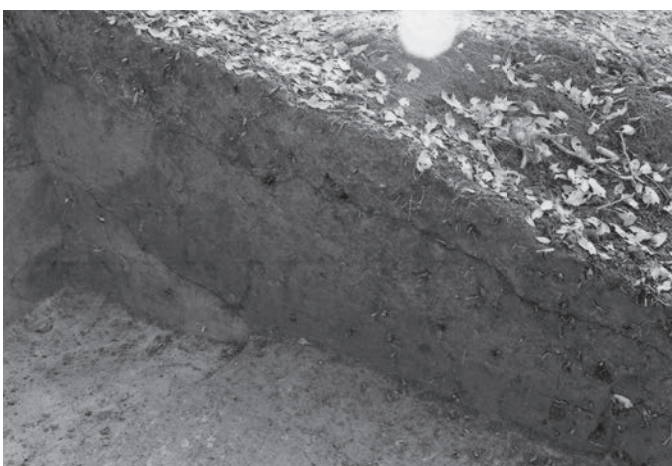
(4)SM-2 清掃後(西から)



(5)トレンチ1・2(東から)



(6)トレンチ1・2(西から)



(7)トレンチ2 西端部土層(北西から)



(8)トレンチ2 西端部土層(西から)



(1) トレンチ3・4(東から)



(2) トレンチ3・4(西から)



(3) トレンチ3 土層(南から)



(4) トレンチ3 西端部土層(東から)



(5) トレンチ4 西端部土層(東から)



(6) トレンチ5(東から)



(7) トレンチ6(東から)



(8) トレンチ7(西から)



(1)SM-1 表土除去(南東から)



(2)SM-1 表土除去(東から)



(1)SM-1 表土除去
南西部(2区)(西から)



(2)SM-1 地山面及び周溝
東部(1区)(南東から)



(3)SM-1 地山面
及び周溝 全景(東から)



(1)SM-1 南西部(2区)



(2)SM-1 北東部(1区)



(3)SM-1 2区 SX-1 プラン検出状況(南東から)



(4)SM-1 2区 SX-1 プラン検出状況(南から)



(5)SM-1 SX-1 土層(東から)



(6)SM-1 SX-1 完掘(東から)



(7)SM-1 2区掘り下げ土層(南から)



(8)SM-1 2区掘り下げ土層(西から)



(1)SM-1 1区土層(南東から)



(2)SM-1 1区(南から)



(3)SM-1 西部(3区)土層(南から)



(4)SM-1 2区中腹(西から)



(5)SM-1 2区西側周溝(南から)



(6)SM-1 2区南側周溝(西から)



(7)SM-1 2区中腹(北から)



(8)SM-1 1区北西部周溝(南から)



(1)SM-2 (北東から)



(2)SM-2 (北西から)



(3)SM-2 マウンド除去後
(北東から)



(1)SM-2 北東部(1区)
(北東から)



(2)SM-2 南東部(2区)
(東から)



(3)SM-2 南部
(南東から)



(1)SM-2 北西部(4区)(北西から)



(2)SM-2 北東部(1区)(東から)



(3)SM-2 南東部(3区)(南から)



(4)SM-2 北東部(1区)(北東から)



(5)SM-2 南東部(2区)(東から)



(6)SM-2 南東部(2区)(南東から)



(7)SM-2 北東部(1区)(東から)



(8)SM-2 東部(東から)



(1) 遺跡遠景(南から)



(2) 遺跡近景(南から)



(3) 東部遺構群(南東から)



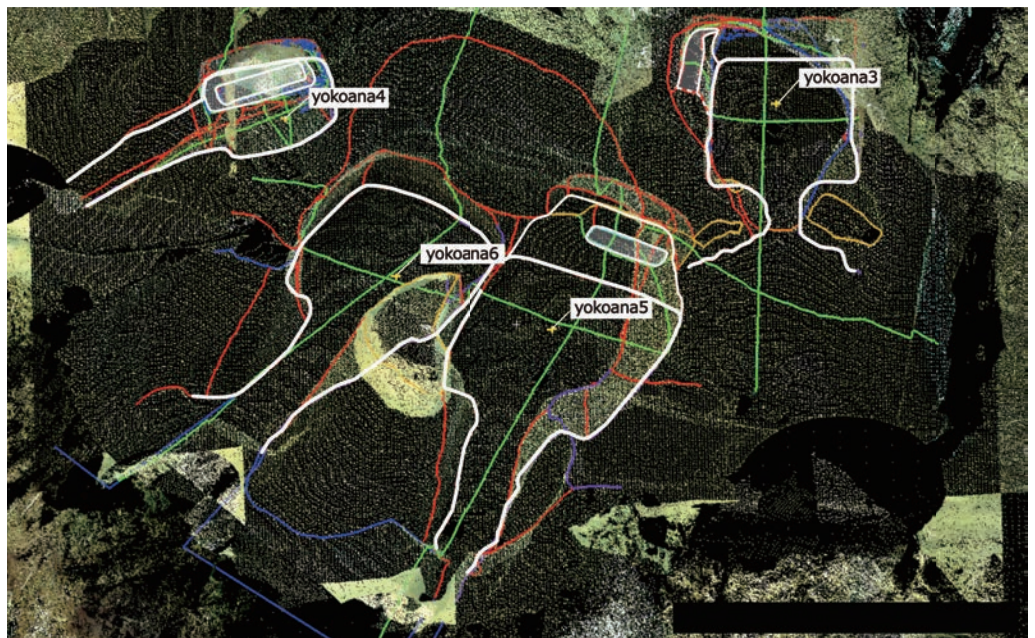
(4) 西部遺構群(南西から) (横穴5・6未調査時)



(1)横穴5・6
(南から)



(2)横穴5奥壁・棺座
(南西から)



(3)横穴3～6
レーザー計測点群画像



(1)横穴1 (東から)



(2)横穴1 調査前(南から)



(3)横穴1 (南から)



(4)横穴1 奥壁(南から)



(5)横穴3 調査前(北西から)



(6)横穴3 (南から)



(7)横穴3 (南から)



(8)横穴3 奥壁(南から)



(1)横穴4 調査前(西から)



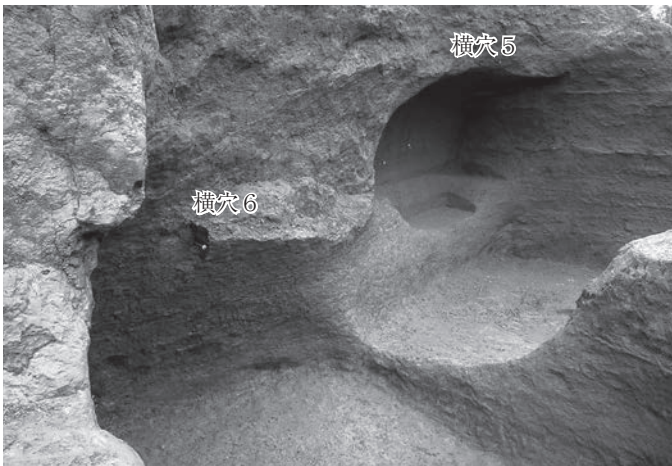
(2)横穴4(南西から)



(3)横穴4 玄室内(南西から)



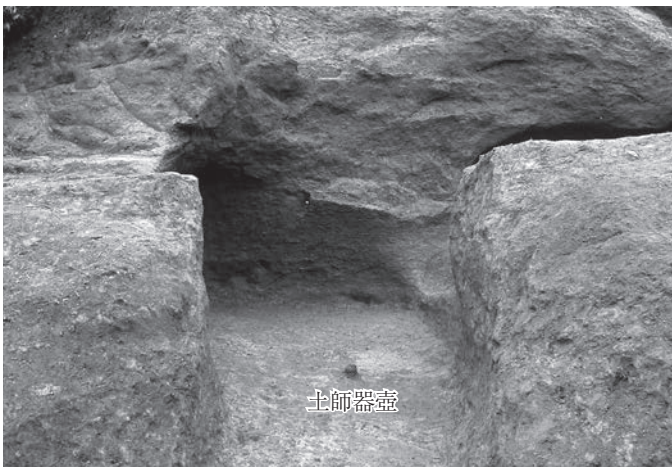
(4)横穴4 棺座(南西から)



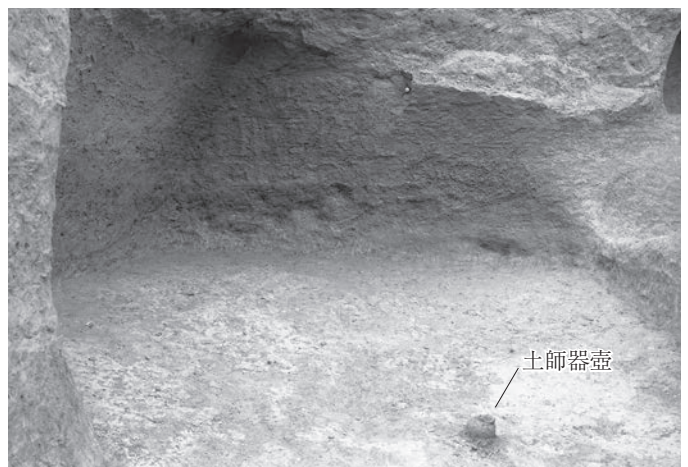
(5)横穴5・6 全景(西から)



(6)横穴5 棺座(南から)



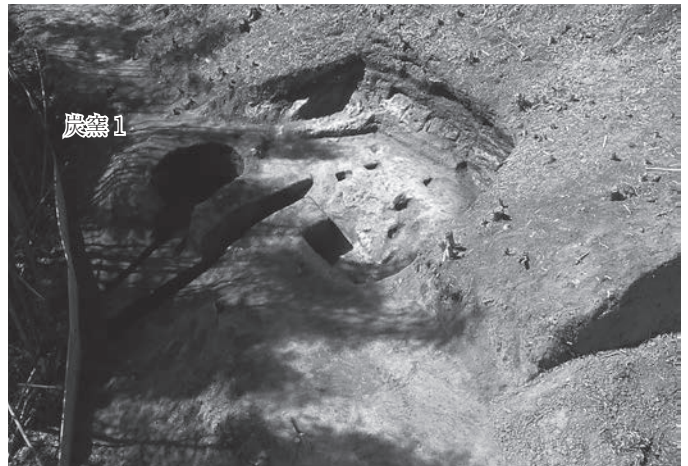
(7)横穴6(南西から)



(8)横穴6 奥壁(南から)



(1)横穴6床～壁面(西から)



(2)やぐら状遺構(南東から)



(3)やぐら状遺構遺物出土状況(1) (南から)



(4)やぐら状遺構中央部遺物出土状況(東から)



(5)炭窯1 (北から)



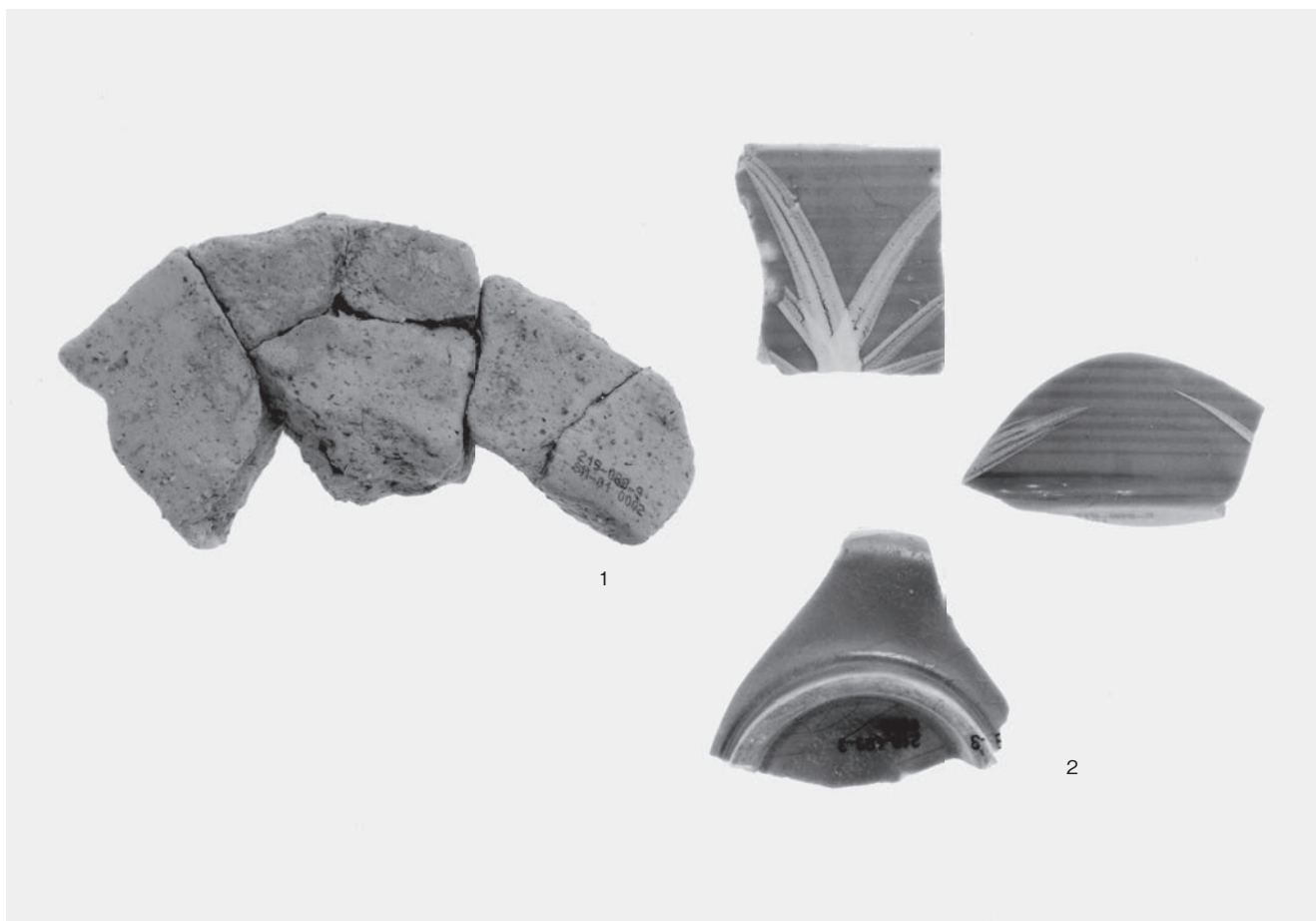
(6)炭窯2 (南東から)



(7)炭窯3 (南西から)



(8)炭窯3 (南西から)

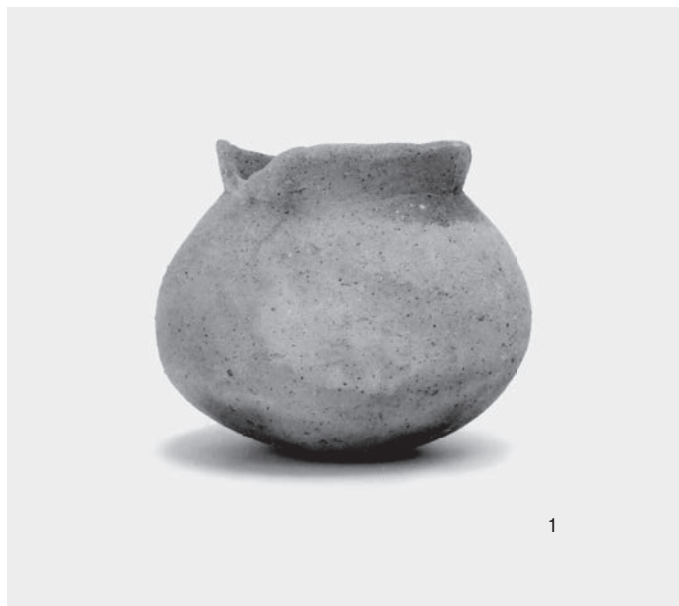


(1)大和田遺跡群(3)出土遺物



(2)大和田遺跡群(7)出土遺物

横穴6出土遺物



(1)土師器壺

やぐら状遺構出土遺物



(2)磁器碗



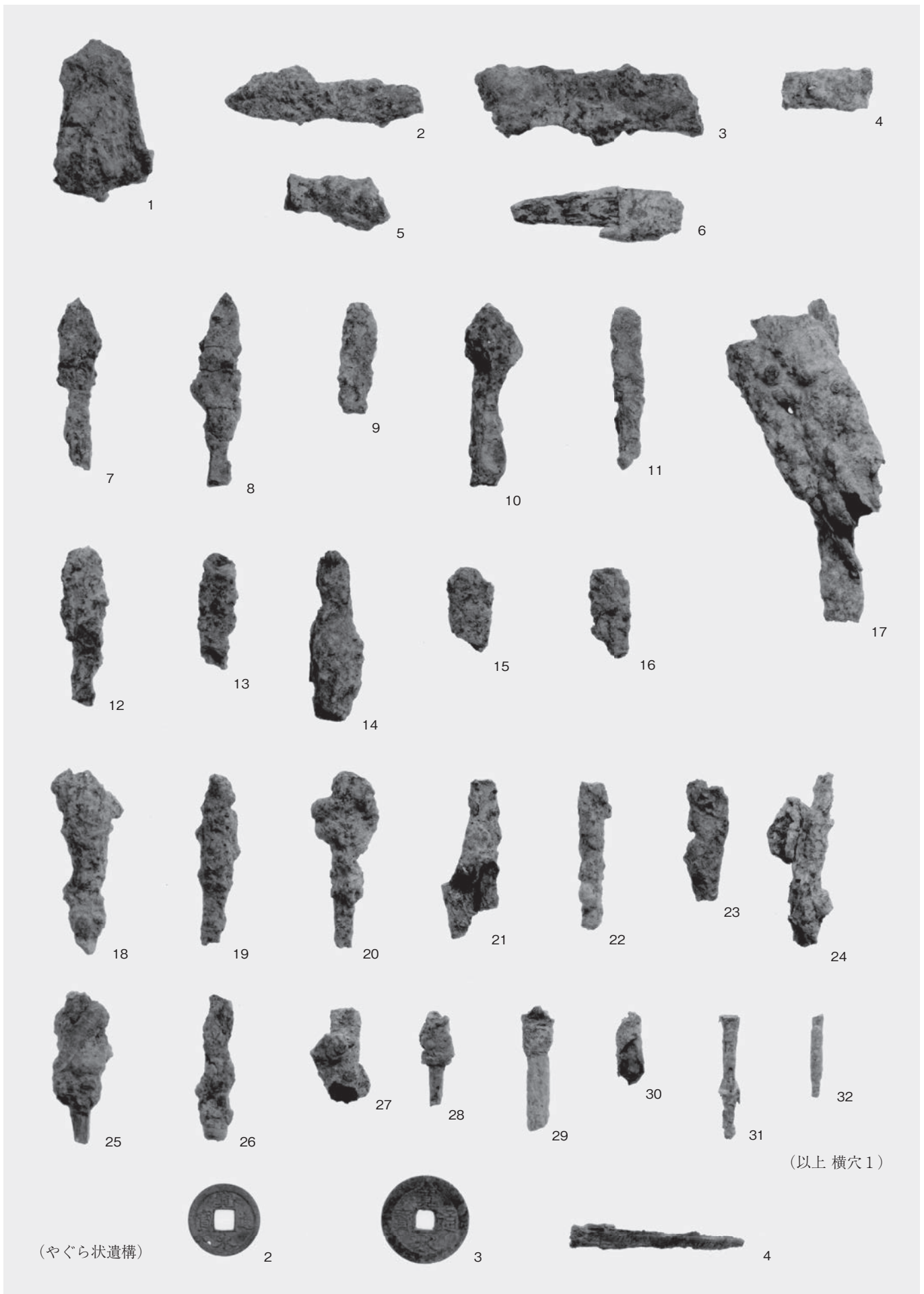
(3)礎石



(4)礎石



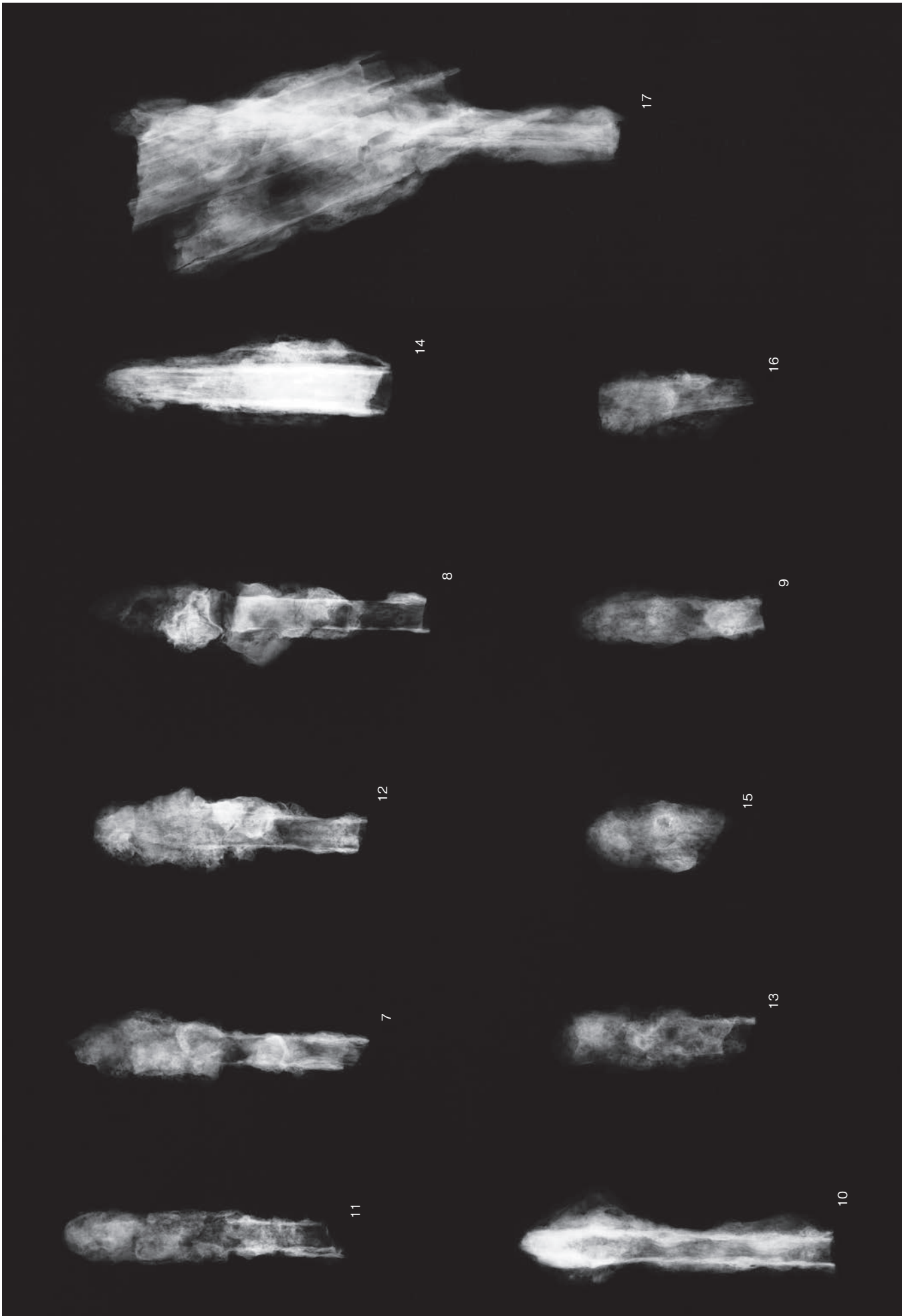
(5)礎石



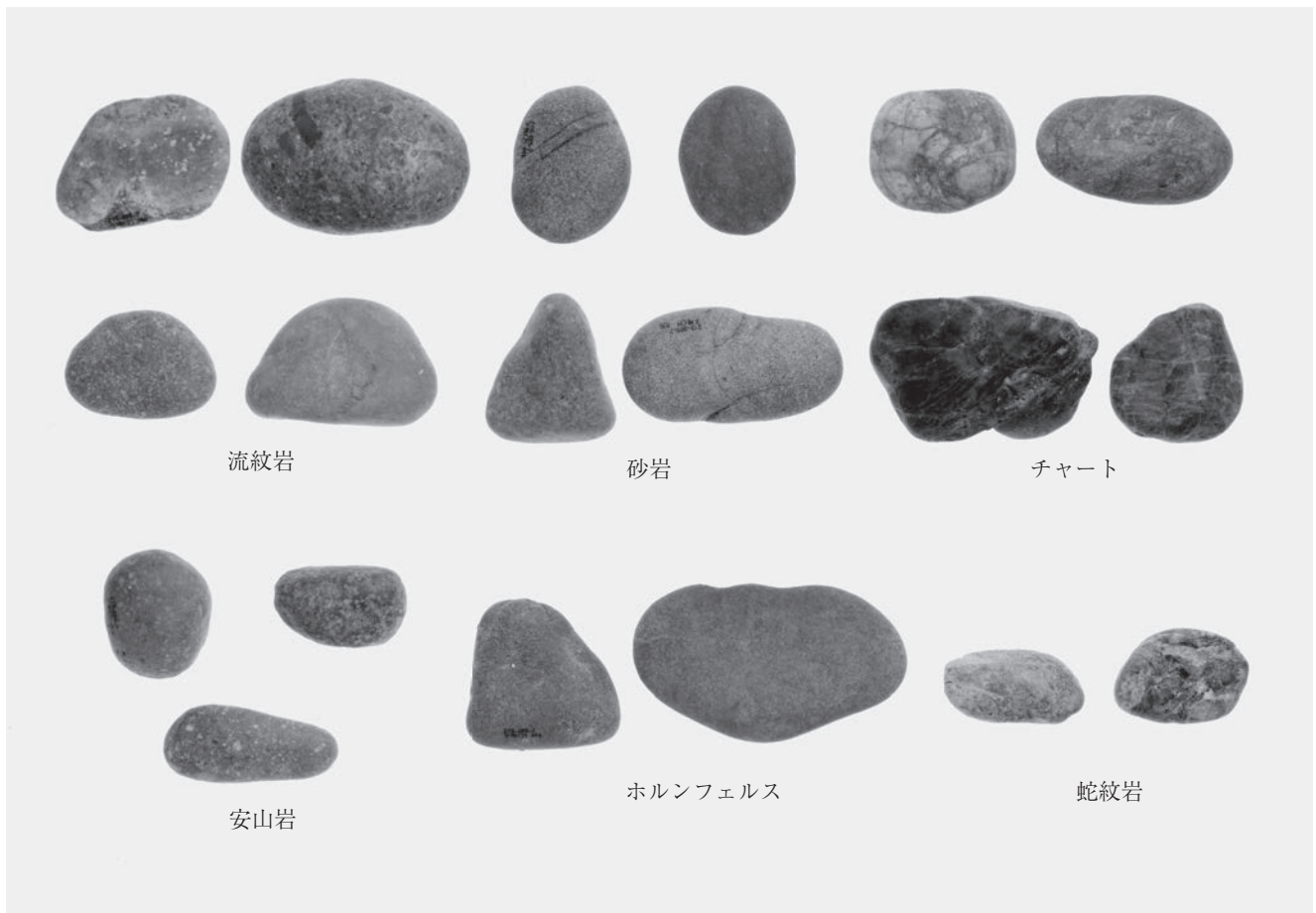
(やぐら状遺構)

(以上 横穴1)

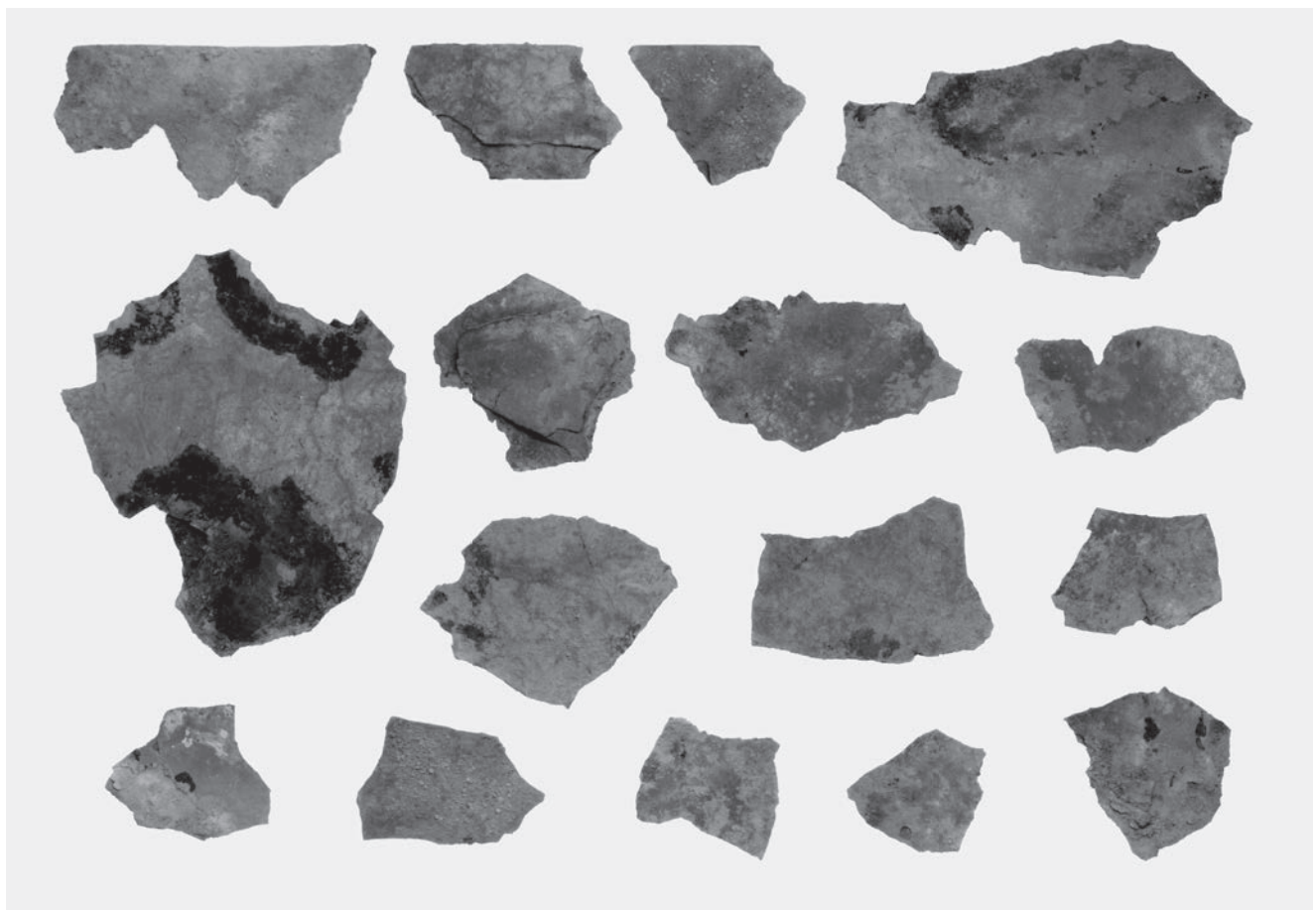
横穴1・やぐら状遺構出土金属製品



横穴1出土金属製品X線写真



(1) やぐら状遺構出土礫



(2) 炭窯1出土金属製品



(1) 調査終了後全景(北から)



(2) 1トレンチ(南東から)



(3) 2トレンチ(南から)



(4) 3トレンチ(南から)



(5) 5トレンチ(西から)



(6) 7トレンチ(南から)



(7) 光厳寺(南から 平成26年撮影)



1

2

(8) 高滝陣屋跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しゅとけんちゅうおううれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書							
副書名	市原市大和田遺跡群(3)・(7)・高滝陣屋跡							
巻次	31							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第757集							
編著者名	井上哲朗							
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043(424)4848							
発行年月日	西暦2016年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大和田遺跡群(3)	市原市大和田字緑岡378-19ほか	219	089-3	35度 21分	140度 9分	20091101 ~ 20100225	2,430㎡	道路建設に伴う埋蔵文化財調査
大和田遺跡群(7)	市原市大和田字三島198-2ほか	219	089-7	35度 21分 26秒	140度 9分 38秒	20110106 ~ 20110329 20110405 ~ 20110621	11,000㎡	
高滝陣屋跡	市原市大和田字三島185-2ほか	219	095	35度 21分 25秒	140度 9分 47秒	20110614 ~ 20110624	1,670㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大和田遺跡群(3)	古墳塚	古墳時代 近世	古墳塚	1基 1基	縄文時代石器、古墳時代土師器、近世陶磁器		古墳は円墳であるが、伴う遺物がなく時期不明。	
大和田遺跡群(7)	横穴墓 やぐら	古墳時代 中・近世	横穴 やぐら状遺構	5基 1基	縄文土器、古墳時代土師器・須恵器・鉄製品(直刀・刀子・鏃・釘)、中・近世陶磁器・土器・銭貨・石製品(砥石・礎石)		横穴は、5世紀代の土師器や鉄鏃が注目される。近世～近代炭窯3基は、横穴を再利用した可能性あり。	
高滝陣屋跡	城館跡	近世	なし		陶磁器			
要約	<p>大和田遺跡群(3)は、近接する緑岡古墳群の一角となる、直径約20m・高さ約1.8mの円墳と直径約7m・高さ約1.1mの中・近世塚が検出された。古墳に伴う遺物は出土せず、主体部も不明確であった。塚からの遺物もなかった。</p> <p>大和田遺跡群(7)は、急斜面部に開口した横穴群である。6世紀後葉に推定される横穴5基の他、中世やぐらの後、近世に祠が置かれたと推測されるやぐら状遺構1基、近世～近代の炭窯3基が検出された。炭窯は古代横穴再利用の可能性も考えられる。</p> <p>高滝陣屋跡は、遺構及び該当時期の遺物は検出されなかった。調査地区が斜面地であること、あるいは近接する光厳寺及び周辺集落が宿所として使用され、陣屋としての新たな新たな建物等が設置されなかった可能性もあるためとみられる。</p>							

千葉県教育振興財団調査報告第757集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書31

－市原市大和田遺跡群(3)・(7)・高滝陣屋跡－

平成28年3月25日発行

編集 公益財団法人 千葉県教育振興財団

発行 国土交通省関東地方整備局
千葉国道事務所
千葉市稲毛区天台5丁目27番1号

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印刷 大和美術印刷株式会社
木更津市中央1-1-6
